

4.平成21・22年度八幡木津線道路整備促進

事業関連遺跡発掘調査報告

(下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群)

1. はじめに

下馬遺跡は、京都府相楽郡精華町大字下狛小字下馬・片山に所在する縄文時代から室町時代の遺跡であり、平安時代後期から鎌倉時代にかけての集落と、室町時代の寺院関連遺跡である。片山遺跡は下馬遺跡の南に隣接し、同町大字下狛小字片山に所在する。片山遺跡は奈良時代から鎌倉時代を中心とする集落遺跡とみられるが、そのほかに弥生時代の石包丁の出土もみている。鞍岡山古墳群は下馬遺跡背後の丘陵上の同町大字下狛小字長芝・砂川ほかに所在する。

今回の発掘調査は、八幡木津線道路整備促進事業に係る発掘調査を京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群の現地調査は、平成20年度から実施している。今回の報告は、平成21年度と平成22年度前半期で実施した発掘調査成果である。調査期間中は、京都府教育委員会、精華町教育委員会、山城南土木事務所など多くの関係機関の方々をはじめ、作業員・調査補助員・整理員の方々のご協力を得た。本報告は竹原が執筆した。各年度の調査体制等は以下の通りである。

調 査 遺 跡 下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

現地調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 主任調査員 竹原一彦

同 調査第3係専門調査員 竹井治雄・石尾政信

調 査 場 所 相楽郡精華町下狛小字下馬・片山・砂川

現地調査期間 平成21年7月21日～平成22年2月23日

調 査 面 積 下馬遺跡 1,980㎡

片山遺跡 500㎡

鞍岡山古墳群 20㎡

[平成22年度(前半期)]

調 査 遺 跡 下馬遺跡・片山遺跡

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

現地調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 主任調査員 竹原一彦

同 調査員 松尾史子

調 査 場 所 相楽郡精華町下狛小字下馬・片山

現地調査期間 平成22年5月25日～8月12日

調査面積 下馬遺跡 245㎡

片山遺跡 455㎡

2. 位置と環境

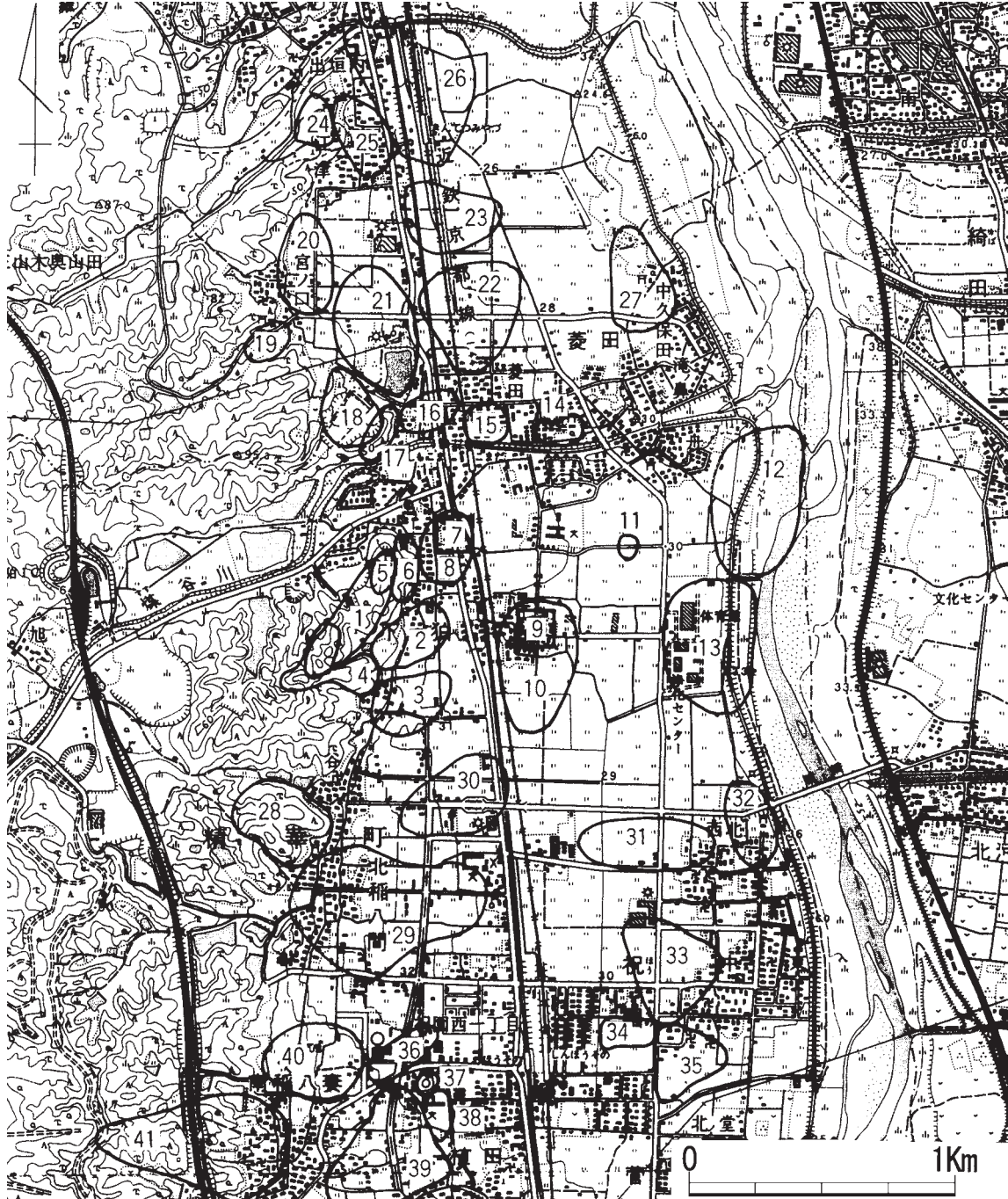
相楽郡精華町は京都府南部の南山城地域にあって、町域の東部は木津川左岸の沖積平野が広がり、中央部以西には奈良県と行政界を接する丘陵が広がる。木津川左岸の沖積平野部は、ほぼJR片町線と近鉄京都線付近を境に東の氾濫平野と西の扇状地に二分される。氾濫平野ではかつての木津川の蛇行を示す旧河道の痕跡や自然堤防が認められ、特に古い集落は自然堤防・扇状地・段丘など、それぞれに木津川の氾濫を回避し得る地形条件を求めて立地している状況が窺える。

下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群は、町域北西部の丘陵上と裾部扇状地に所在する。また、周辺部には縄文時代から中世の各時期の遺跡が数多く分布している。縄文時代では、中世の代表的な遺跡である椋ノ木遺跡で縄文土器の出土をみているほか、百久保地先遺跡が知られる。弥生時代では、散布地であるが下馬遺跡北側の扇状地に山路遺跡(前期)と西ノ口遺跡(後期)、丘陵上の薬師山遺跡(後期)が存在する。鞍岡山古墳群の南部には弥生時代後期の台状墓や土壙墓、古墳時代後期の土壙を検出した大福寺遺跡があり、縄文時代の石匙も出土している。

古墳時代では、町域北部丘陵上に平谷古墳群(前期～後期)・鞍岡山古墳群(前期～中期)が煤谷川を挟んで所在する。鞍岡山古墳群は4基の円墳からなる古墳群である。盟主墳である3号墳(中期前半)は直径約40m、高さ約6.5mを測り、墳丘には葺石と埴輪が伴う。埋葬施設には2基の粘土郭がある。調査によって2基の埋葬施設からは、短甲・剣・刀等の鉄製武器類、鉄製農耕具類、石製模造品類などの豊富な副葬品が出土している。大福寺古墳出土とされる甕籠鏡は3号墳出土の可能性がある。直径30mの1号墳(前期後半)は未調査であるが、過去に墳丘裾から埴輪棺が出土している。2号墳(直径30m、高さ3m)は前年度に当調査研究センターが発掘調査を実施し、木棺直葬の墓壙内から2基の割竹形木棺跡を検出している。規模の大きな西棺は棺外から鉄製武器(剣1・槍4)、やや小さな東棺は棺内から仿製四獣形鏡1面と玉類が出土している。また、同丘陵では大福寺採集と記された陶棺(大福寺古墳)の存在が伝えられるが、大福寺古墳の位置は不明である。近隣での集落は柿添遺跡が知られ、前期の竪穴式住居跡などが検出されている。

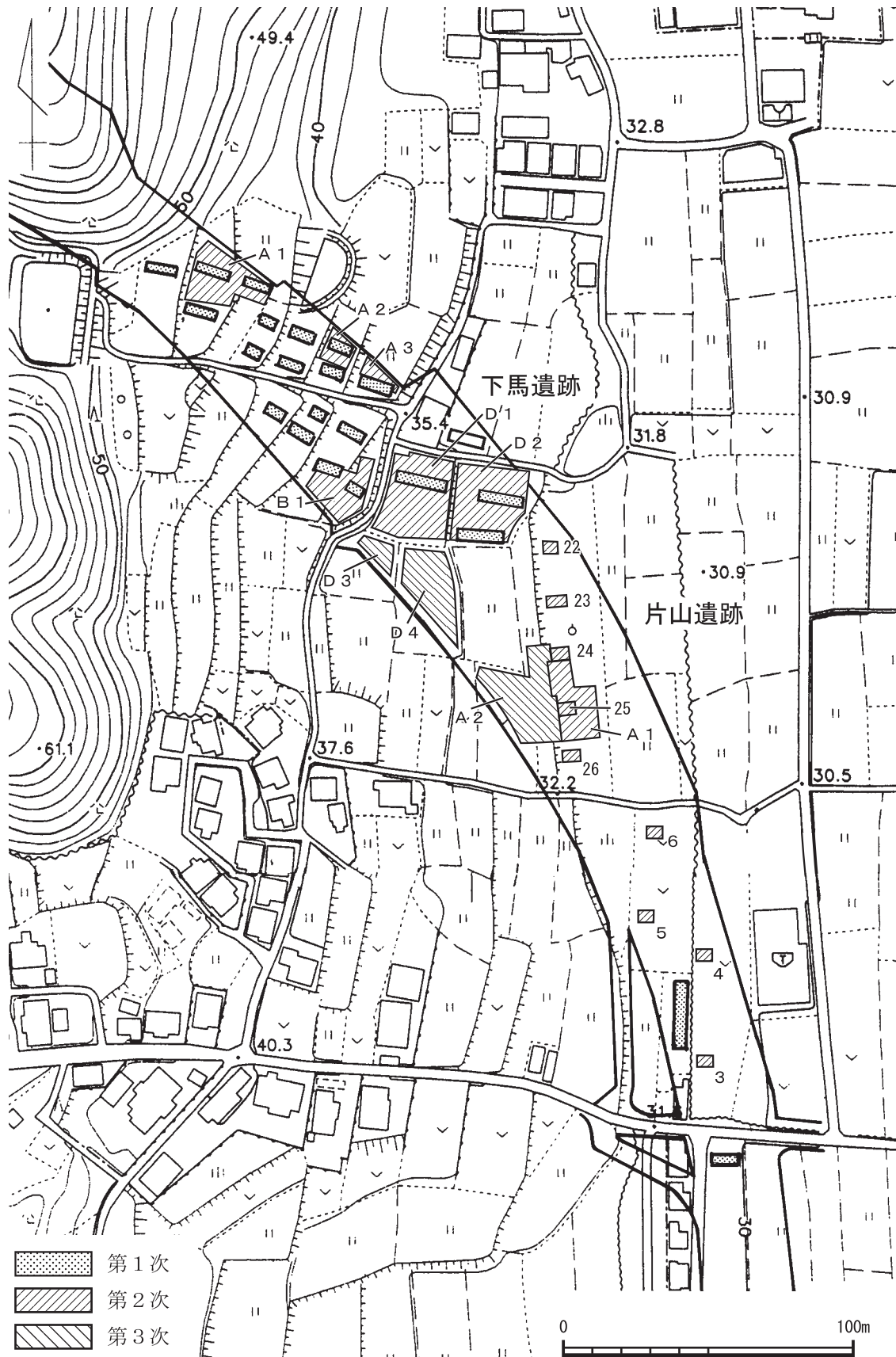
奈良時代以降では、平野部に里廃寺(飛鳥時代後期～奈良時代)、JR下狛駅の南側丘陵裾部に下狛廃寺(平安時代後期～中世)が知られている。下狛廃寺を含む一帯は拝殿遺跡(古墳時代後期～奈良時代)でもある。丘陵上の鞍岡神社遺跡(弥生～奈良時代)では磨製石鏃と瓦が採取されている。

中世には椋ノ木遺跡において、掘立柱建物跡、柵、井戸、土壙墓、溝等が検出されている。また、平野部には条里の規制を受けた畦畔・水路・道路の景観が良く残っている。



第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 田辺)

- | | | | | | |
|-----------------|-----------|------------------|-----------------|------------|-----------|
| 1. 鞍岡山古墳群 | 2. 下馬遺跡 | 3. 片山遺跡 | 4. 大福寺遺跡 | 5. 鞍岡神社遺跡 | 6. 鞍岡山遺跡 |
| 7. 下粕廃寺 | 8. 拝殿遺跡 | 9. 里廃寺 | 10. 里遺跡 | 11. 石ヶ町遺跡 | |
| 12. 百久保地先遺跡 | 13. 棕ノ木遺跡 | 14. 春日神社遺跡 | 15. 前川原遺跡(大北城跡) | | |
| 16. 西ノ口遺跡 | 17. 薬師山遺跡 | 18. 平谷古墳群 | 19. 白山遺跡 | 20. 屋敷田遺跡 | 21. 宮ノ口遺跡 |
| 22. 山路遺跡 | 23. 桑町遺跡 | 24. 三山木廃寺 | 25. 佐牙垣内遺跡 | 26. 宮ノ下遺跡 | 27. 元屋敷遺跡 |
| 28. 城山遺跡(稲屋妻城跡) | 29. 北稲遺跡 | 30. 柿添遺跡 | 31. 西垣内遺跡 | 32. 祝園神社遺跡 | |
| 33. 中垣内遺跡 | 34. 城ノ内遺跡 | 35. 古屋敷遺跡 | 36. 北尻遺跡 | 37. 丸山古墳 | 38. 祝園遺跡 |
| 39. 森垣外遺跡 | 40. 南稲遺跡 | 41. 政ヶ谷遺跡(稲八妻城跡) | | | |



第2図 下馬遺跡・片山遺跡調査トレンチ配置図

3. 平成21年度下馬遺跡の調査(第2次調査)

1) 調査概要

平成20年度に実施した21か所のトレンチ(第1～第21トレンチ)の調査成果をもとに、良好な遺構分布や遺物の集中するトレンチ周辺を拡張して面的調査を実施した。調査対象地の現況は西から東方向に下る扇状地に設けられた階段状の耕作地であり、道路や周辺耕作地との水利の制約から調査地はA1～A3・B1・D1・D2の6地点に分かれた。北西側最高所のA1地区と低い南東部のD2地区間は水平距離約110m、遺構面の比高差は約11mを測る。

A1地区は調査対象地の北西端、丘陵裾に位置する。前年度調査の第2・9トレンチ周辺部を拡張調査した。調査地の地形は階段状を呈し、東部が約1m下がる平坦地をなしている。遺構は室町時代を中心として検出しており、東西の階段状平坦面上において検出した。遺構の状況から階段状地形は、室町時代には存在していたことが明らかになった。西側上段では、自然河川跡であるSR125と瓦溜りSX120のほか、方形や円形の掘形をもつ柱穴を検出した。一方、東側下段では土坑SK07・SX12、炉跡SX121、井戸SE129、溝SD123などを検出した。縄文時代晩期のSR125以外の遺構は、ほぼ室町時代に属するものである。

A2地区はA1地区の南東約24mに位置し、A1地区下段テラスとの遺構面の比高差は約4.1mを測る。前年度調査の第18トレンチで柱穴列を検出したことから、本調査を実施した。調査の結果、調査区の北西部から、掘立柱建物跡(SB58)1棟を検出した。遺構面は西から東にかけて傾斜し、低い東側に中世遺物を含む薄い包含層が存在した。

A3地区はA2地区の南東側下段に位置し、A2地区東端部との遺構面の比高差は約1.9mを測る。前年度の第16トレンチで奈良時代の河川跡SR16を検出したことから周辺部を拡張して本調査を実施した。検出遺構はSR16のほか、橋脚SX57、土坑SK75がある。SR16とSX57は奈良時代、SK75は平安時代後期～鎌倉時代に属する。

B1地区はA3地区の南側に位置し、約20m離れている。前年度に第13・14トレンチで柱穴を検出したことから拡張して本調査を実施した。多数の柱穴と土坑、素掘り溝を検出し、掘立柱建物跡と判断する2棟の建物跡(SB132・133)を検出した。遺構面は西から東に緩やかに傾斜し、西端部と東端部の比高差は約1.2mを測る。暗茶褐色砂質土層には奈良時代から鎌倉時代の土器を含み、調査区の東部で検出した。調査区西部は出土遺物も僅かで、後世の削平を受けていた。

D1地区はB1地区の東に位置する。前年度の第21トレンチで土坑と柱穴列を検出したことから、本調査を実施した。多数の柱穴が広範囲に存在し、掘立柱建物跡3棟(SB134～136)、柵列(SA03・24・30・44・57・85・136)を検出した。また、土坑(SK23・36)、井戸SE01、溝状遺構SX02等の遺構も検出した。遺構面は緩やかに東に傾斜し、東端部付近は後世に大きく削平を受けている。D1地区検出の遺構は平安時代後期から鎌倉時代に属している。

D2地区はD1地区の東に位置する。遺構面は緩やかに東に傾斜している。前年度の第10・11トレンチで柱穴、井戸、土坑を検出したことから、本調査を実施した。検出遺構には溝状遺構SX02、掘立柱建物跡(SB55)1棟、井戸(SE32・54)、土坑がある。D1地区検出の遺構は平安

時代後期から鎌倉時代に属している。

2) 検出遺構

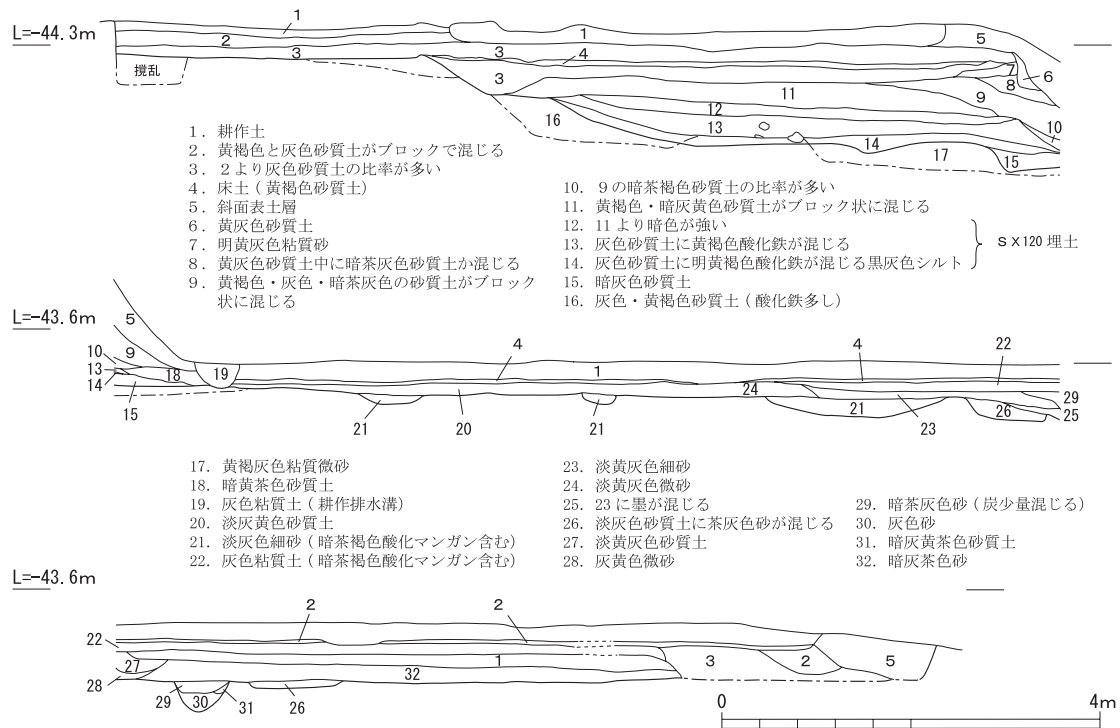
(1) A1地区

河川跡SR125(第4図) 丘陵裾部を南西から北東方向に、蛇行しながら緩やかに下る河川跡である。川幅は調査地西端部で5m、北東端で約8mを測る。深さは約1mで断面形は幅広な「U」字形を呈する。底部付近には黒色粘質土が厚く堆積(厚さ約0.6m)し、この土層中から縄文時代晩期の土器破片(第19図1~3)が出土した。土器の出土量は極めて僅かである。縄文土器以外では、SR125の南側河岸部の精査でサヌカイト製削器(第19図4)が出土した。

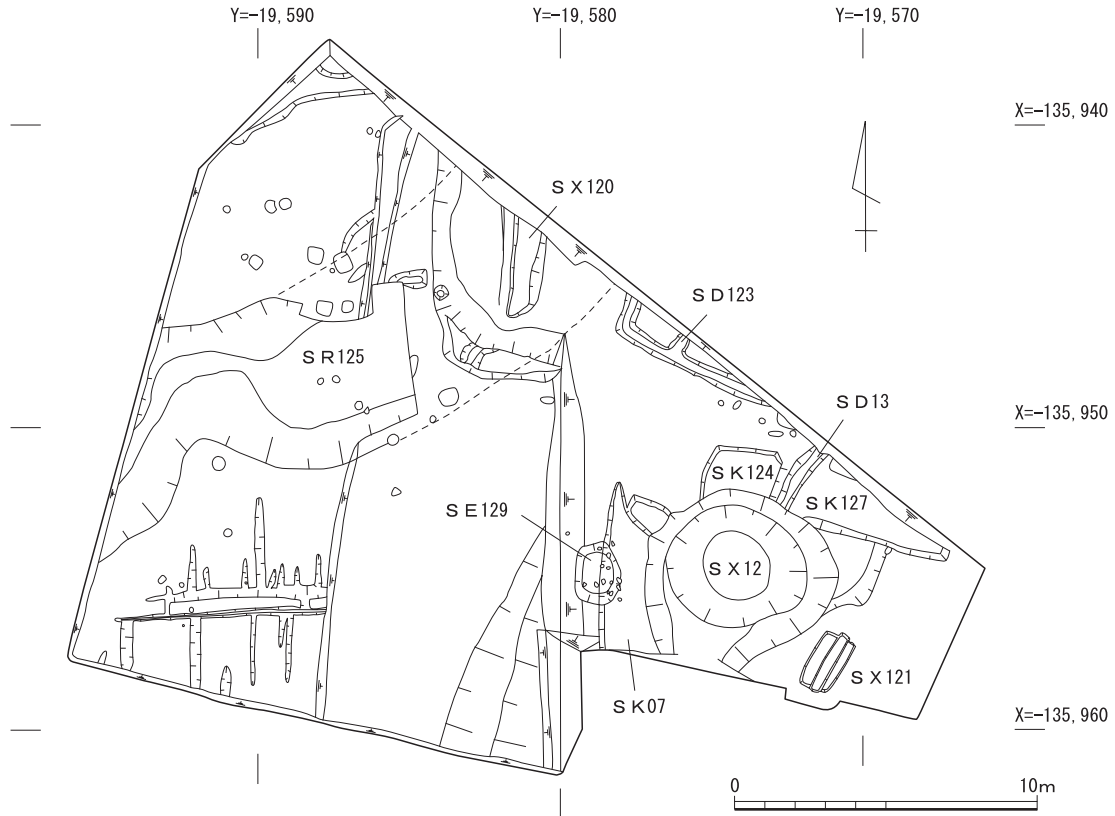
土坑SX12(第6図) 第9トレンチの調査で部分検出していた円形を呈する土坑である。北半部分の平面形は直径約7mの正円形を示すが、南部はやや西方向に溝状に延びる状況にある。円形に近い土坑底は丸みをもち、検出面からの深さは0.6mを測る。土坑南西部は調査地外に延び、土坑全体の形状が把握できないが、溝状の南西部は幅約2.7mを測り、底面は土坑中央の最深部から一段(約0.15m)上がっている。土坑底には約0.25mの厚さで暗灰色泥質土が堆積していた。常に滞水していたとみられることから、池状の施設であった可能性も考えられる。出土遺物には土師器皿(第19図9~11)、瓦器椀、火舎(第19図19)、瓦等がある。

土坑SK07(第4図) 土坑SX12と井戸SE129の埋没後に設けられた方形の土坑である。土坑南部は調査地外となることから全容は不明であるが、全長5.5m以上、幅約2.0m、深さ0.2mの規模を測る。埋土中から少量の瓦と火舎(第19図18)が出土した。

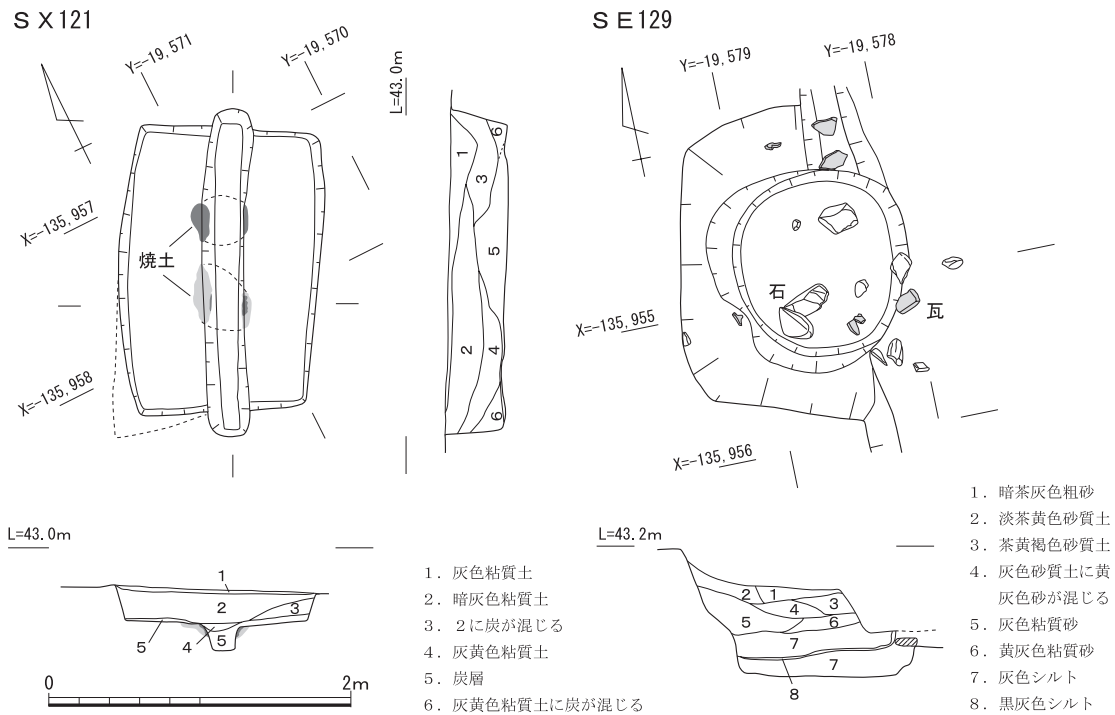
炉跡SX121(第5図) 円形土坑SX12の南東で検出した炉跡である。長方形を呈する土坑の底面中央に焼土が存在する。土坑の規模は全長約1.9m、幅1.3m、深さ0.2mを測る。土坑底面の



第3図 下馬遺跡A1地区北東壁断面図

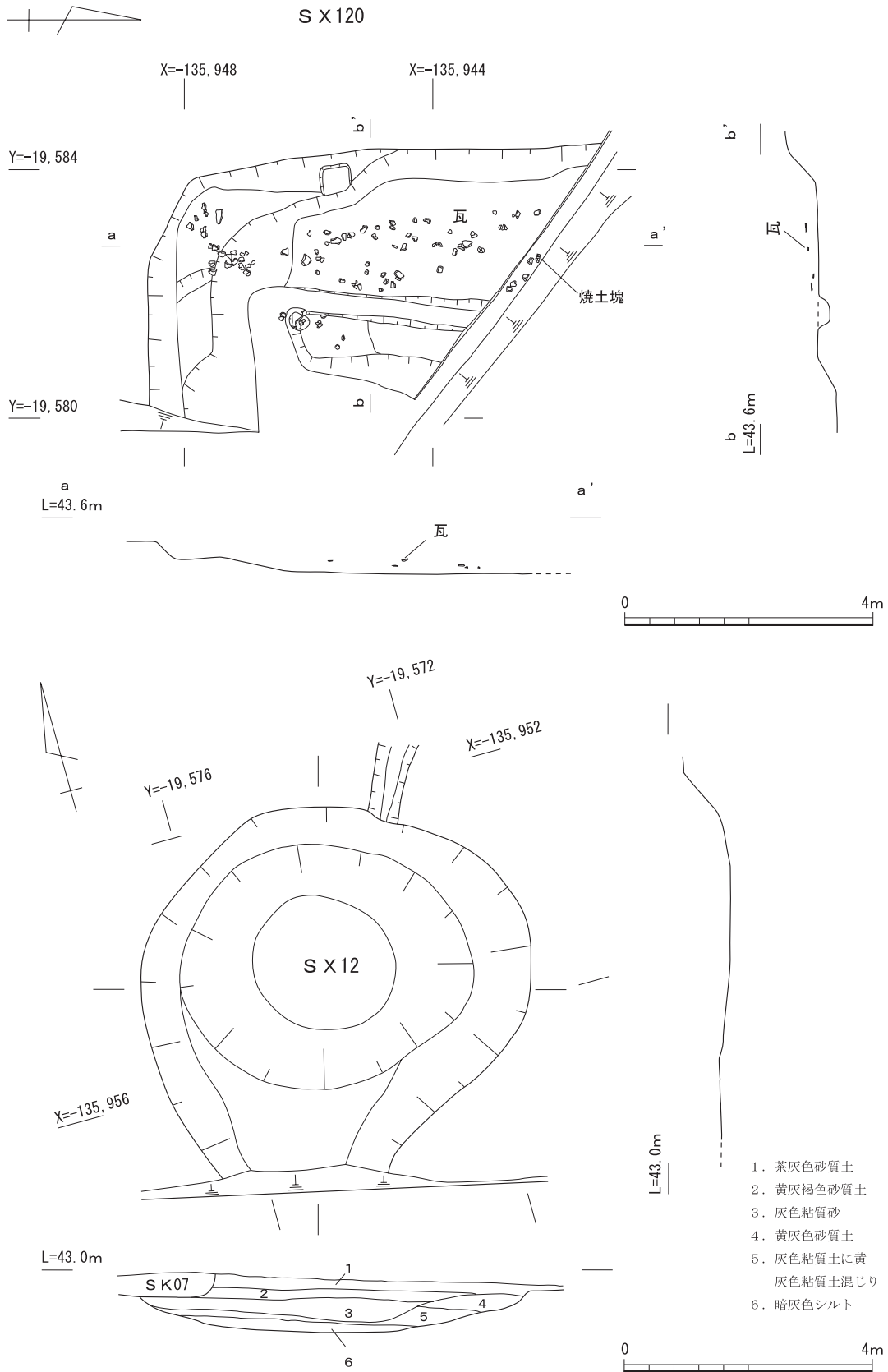


第4図 下馬遺跡A1地区遺構平面図



第5図 下馬遺跡A1地区炉跡SX121、井戸SE129実測図

中央部に2か所の炉跡が存在するが、炉跡は中央部が溝状の掘り込みで壊されていた。この溝状の掘り込みは土坑の中央を縦断し、両端部は土坑壁からそれぞれ0.2mほど突出している。溝幅0.25m、深さは土坑底から0.16mを測る。この溝の破壊から免れた炉跡の焼土の一部が溝の両肩



第6図 下馬遺跡A1地区瓦溜まりS X 120、土坑S X 12実測図

部に確認された。炉跡の焼土の広がりを円形とすると、2か所の炉跡(直径約0.3m)が推測される。この場合、2基の炉跡の心々間距離は約0.6mとなる。炉跡の中央部が壊されていることから、炉跡の中央部が連結するだるま型を呈していた可能性もあるが、詳細は不明である。土坑底には全体に黒色の炭・灰があり、炉跡を破壊した溝内にも炉跡の焼土の碎片を含んだ炭・灰が充満していた。このような状況から、ここでは炉の廃棄に伴って炉の中心部を溝で破壊し、その後土坑内で火を焚き、埋め戻したとみられる。炉跡の破壊と火を焚く行為は祭祀に関連したものと判断されるが、ここでは祭祀関連の遺物の出土はみられない。調査過程で埋土中から小さな角釘の破片が出土したことから、このS X121は鍛冶関連の炉跡の可能性が高い。また、土坑埋土から土師器皿、瓦器椀の破片が出土した。

瓦溜りS X120(第6図) A1地区西部の上段平坦面北端で検出した掘り込み状の遺構であり、多くの瓦が出土した。掘り込みは上段の東縁辺に設けられ、東側は壁がなく開放状況にある。掘り込みの北側は調査地外に延びることから、全容は不明である。検出範囲は西壁側で長さ6.5m、南壁が3.6m、西壁での深さは0.3～0.5mを測る。底面は調査地東側下段面から約0.3m高い位置にある。西側の壁面は急角度で立ち上がるが、南西部の壁面はやや緩やかな傾斜状況を示す。瓦は掘り込みの底面から0.05～0.1m遊離して出土し、南西部の壁面付近では斜面に貼り付く状況もみられた。出土遺物には、巴文軒丸瓦(第19図13・14)・唐草文軒平瓦(第19図15・16)を含む多数の平瓦と丸瓦のほか、土師器皿、羽釜等の土器(第19図5～8)がある。

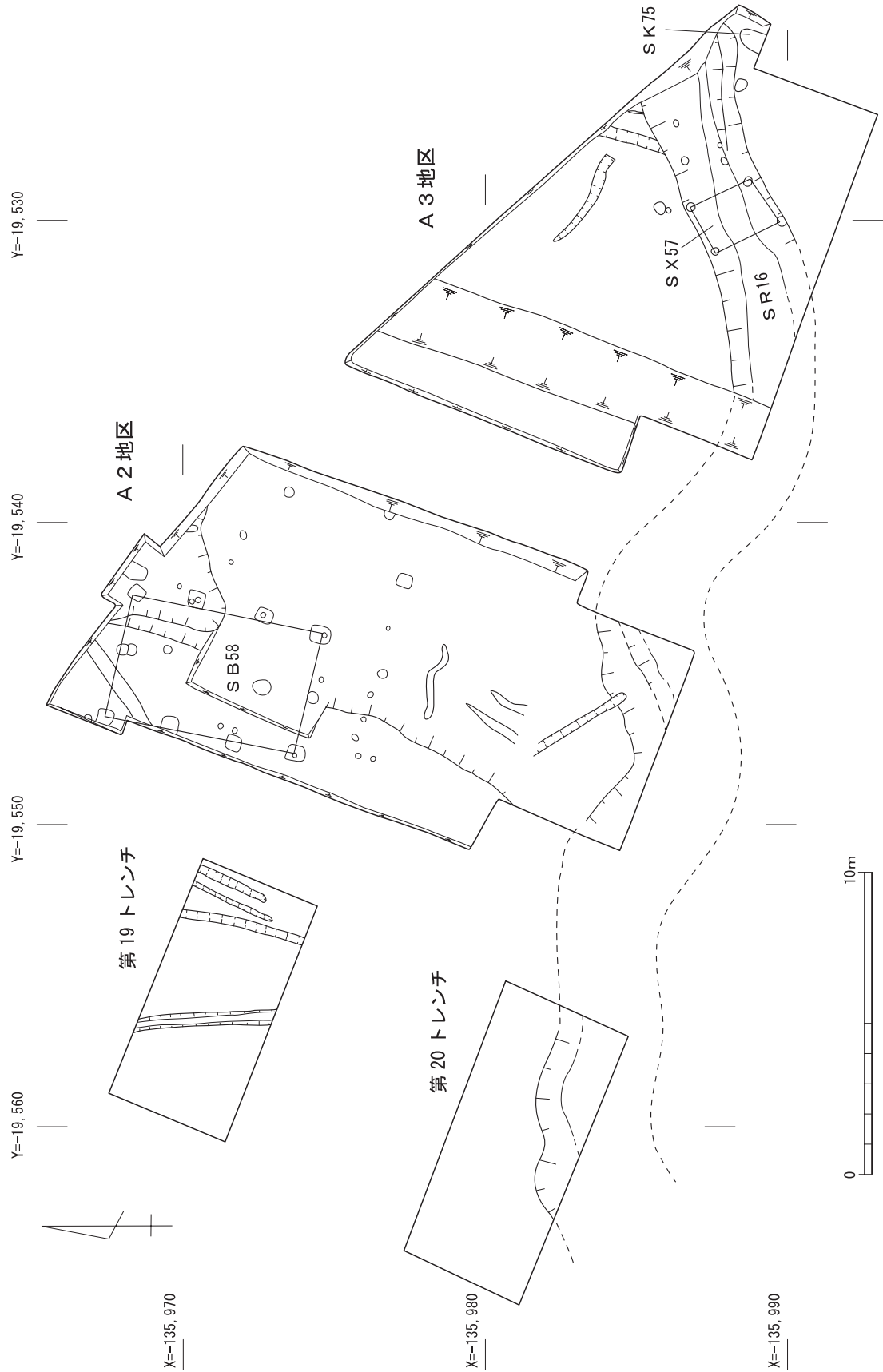
井戸S E129(第5図) A1地区中央部、下段テラスの南西端部で検出した井戸である。井戸の掘形は方形を呈し、井戸部分を円形に掘り下げている。井戸部分は直径約1.2m、深さは検出面から約0.9mを測る。掘形の一辺は約1.9mを測る。井戸底面に人頭大の石が数点みられたが、素掘り井戸と考えられる。井戸底には暗灰色泥質土が堆積し、瓦器椀が出土している。

溝S D123(第4図) 下段テラスS X12の北側で検出した素掘り溝である。溝幅約0.5m、深さは0.1mを測る。溝は西端部で「L」字に折れ、西端から東約2m付近で南北方向溝(6.5m以上)が東西溝に接続している。東西溝と2条の南北溝はそれぞれ東と北側が調査区外に延びることからその性格や全容については不明である。溝内には淡灰色砂が堆積し、瓦質播鉢(第19図12)が出土した。

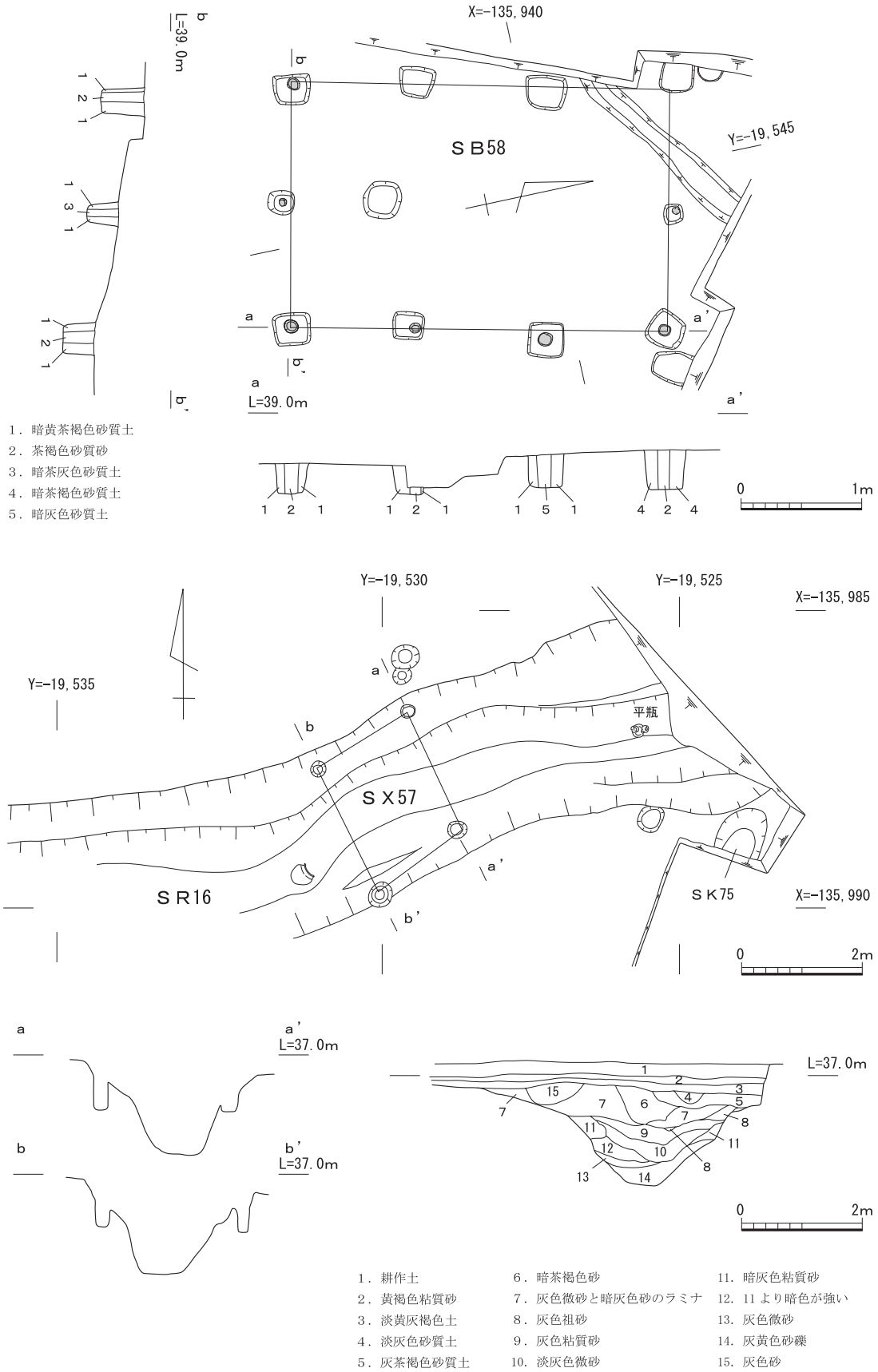
(2) A2地区

掘立柱建物跡S B58(第8図) 調査区北端で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物規模は、桁行3間(約6.2m)×梁間2間(約4.0m)を測る。建物跡の方位は北から東に約12°振っている。柱穴は方形掘形と円形掘形が混在する。柱穴の掘形は0.3～0.4mの規模を測る。柱穴掘形の底面レベルは東側桁行柱列が西側桁行柱列に比べ低い位置にあり、遺構面の傾斜と同様の状況にある。これはS B58が傾斜地に建築された建物であり、建物内には床張りが行われていたと考えられる。調査区南側の第17トレンチで検出した河川跡S R16の北岸とS B58の位置関係は、S B58が北に約10m離れている。建物跡に伴う柱穴内から出土遺物はみられない。

(3) A3地区



第7図 下馬遺跡A2・3地区遺構平面図



第8図 下馬遺跡A2・3地区掘立柱建物跡S B58、橋脚S X57実測図

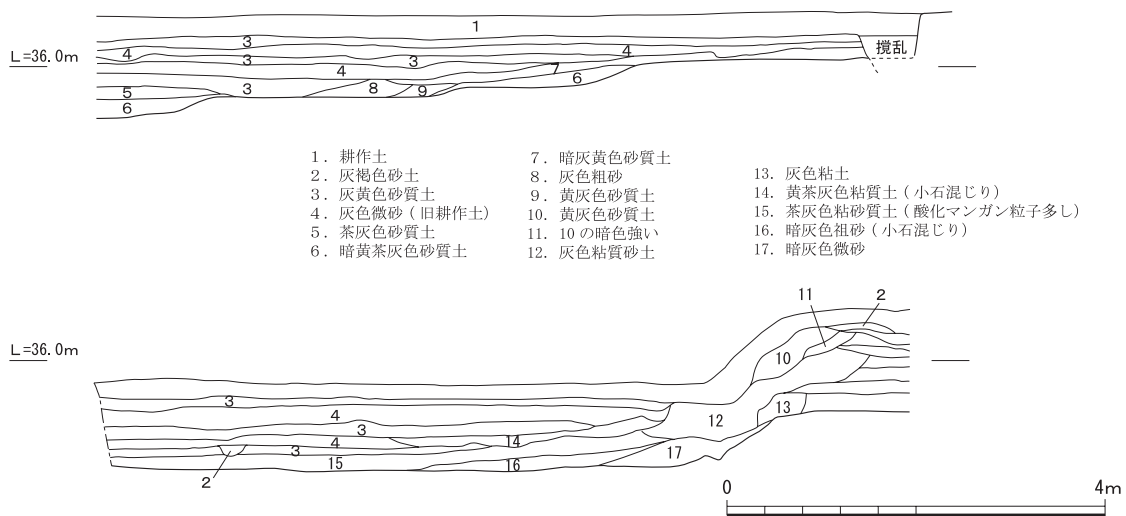
河川跡 S R 16(第8図) 調査区を南西から北東に横断する河道跡を検出した第16トレンチ検出分と合わせ、検出した長さは11mを測る。幅は約3m、深さは約1.5m、横断面は「V」字状を呈する。河道兩岸下部には暗灰色粘質土が堆積し、河道中央部底には礫混じりの粗砂が堆積していた。河道が埋没するにつれ河道中央部に粗砂の堆積が積み重なる状況は、流水量的変化が頻繁にあったことを表している。最下層の粗砂内を中心に河道堆積土中から、奈良時代後期の須恵器(第20図20～21・28～31)と土師器(第20図22～27)が出土した。このうち平瓶(30・31)は、橋脚 S X 57の下流約3.5m付近の川底から重なり合って出土した。

橋脚 S X 57(第8図) 河川跡 S R 16との関連性から橋脚と判断される遺構である。S R 16に直交する1間×1間で2列4個の柱穴を検出した。穴は底面が平坦であることから杭跡とは考えられず、柱穴と判断した。柱穴は河岸斜面に穿たれ、柱穴の間隔はa-b間が約1.8m、a-a'間が約2.1mの規模を測る。柱穴は円形で、直径は0.2～0.3mである。穴の深さは0.3～0.6mであるが、底面の位置はほぼ同一レベルに揃えている。

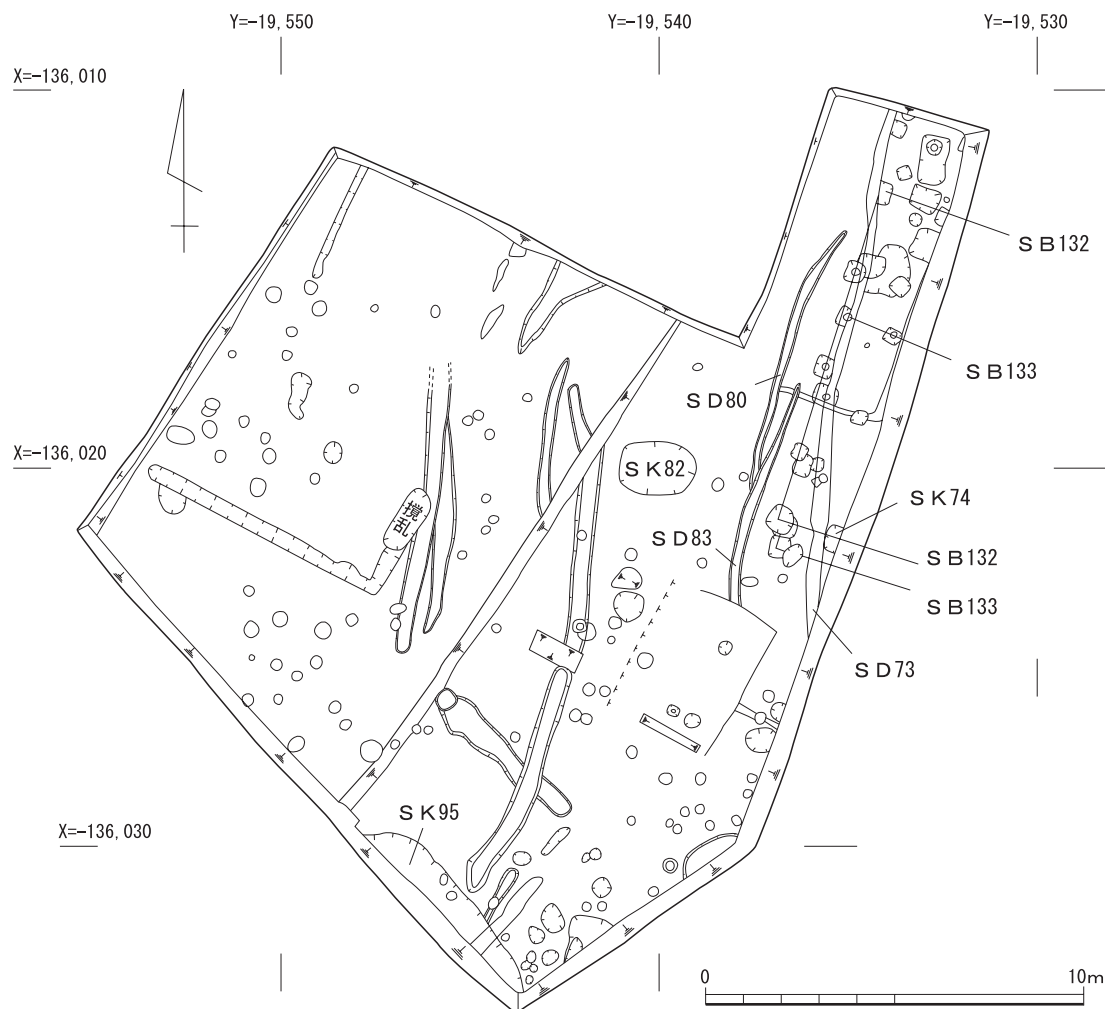
土坑 S K 75(第8図) 調査区の東端部、S R 16右岸部で検出した土坑である。部分検出であり、掘形は円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。幅約0.7m、深さは約0.3mを測る。土坑埋土の茶灰色粘質土から瓦器碗の破片が出土した。

(4) B 1 地区

掘立柱建物跡 S B 132(第10図) 調査区の北東端で検出した南北棟の掘立柱建物跡であり、掘立柱建物跡 S B 133と重複している。S B 132は2間×4間の規模と推測されるが、建物東部が調査区外に位置することから、建物跡の全容については不明である。建物跡西側の桁行柱列の4間は心々間で約9.7mを測る。1間の間隔は約2.4mである。東西の梁間は、南側妻部が1間約1.5mを測る。柱穴掘形は方形と円形のプランが混在し、一辺ないし直径が0.4～0.5m、深さは約0.4mを測る。柱穴埋土は茶褐色砂質土であるが、時期を特定する遺物の出土がみられない。S B 132の主軸は北から東に約18°振っている。



第9図 下馬遺跡B1地区南壁土層図



第10図 下馬遺跡B1地区遺構平面図

掘立柱建物跡SB133(第10図) 2間×3間の掘立柱建物と推定されるが、建物跡の東部が調査区外に位置することから、詳細は不明である。桁行3間の全長は約6.1m、梁間は1間約1.4mの規模を測る。柱穴掘形は方形と円形のプランが混在し、一辺ないし直径が0.3～0.5m、深さは約0.3mを測る。建物跡西側の桁行柱列がSB132西側柱列とほとんど重複することから、SB133とSB132は建て替え関係にあるとみられる。各柱穴に切り合いが無いことから建物の先後関係は不明である。建物跡の方位は北から東に約16°振る。

柱穴検出作業中、遺構の特定はできないが、周辺部から第21図34～36の須恵器が出土している。確証を得ることができないが、建物跡の年代を示す可能性のある遺物である。

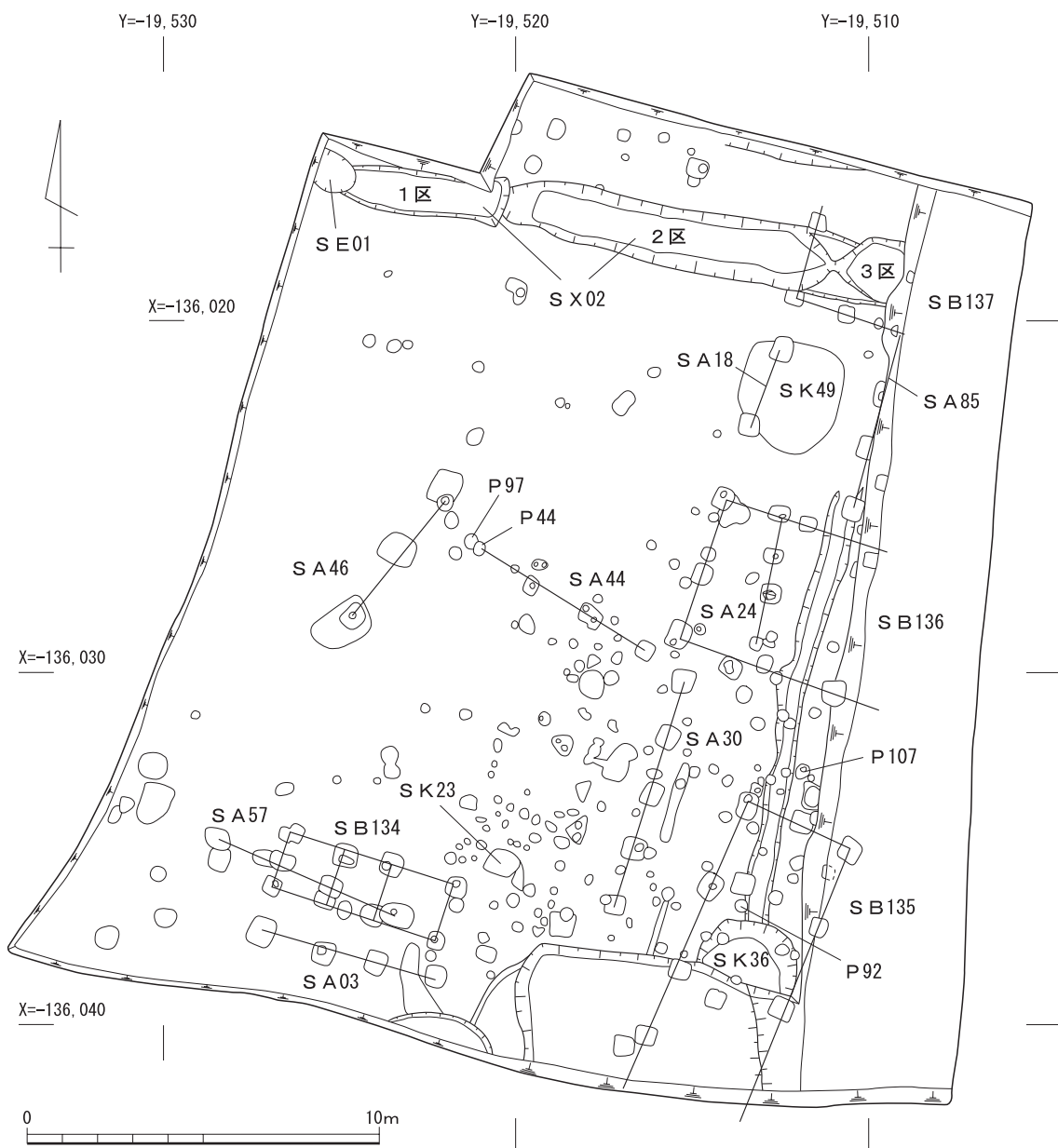
溝SD80・83(第10図) 掘立柱建物SB132・133の西側やや離れた位置で検出した溝跡であり、SD83がSD80を切っている。この2条の溝は、幅約0.25m、深さ約0.05mを測る素掘り溝である。溝の埋土は茶褐色砂質土である。SD80から杯A(第22図67)の出土をみた。また、SD83では、第21図32・33にみる奈良時代後期の土師器皿と須恵器杯Bの出土をみた。

建物跡の柱間列とは1m前後の間隔がある。建物の軒下雨落ち溝の可能性も高く、位置関係からSB132とSD80、SB133とSD83がそれぞれ対応すると考えることもできる。

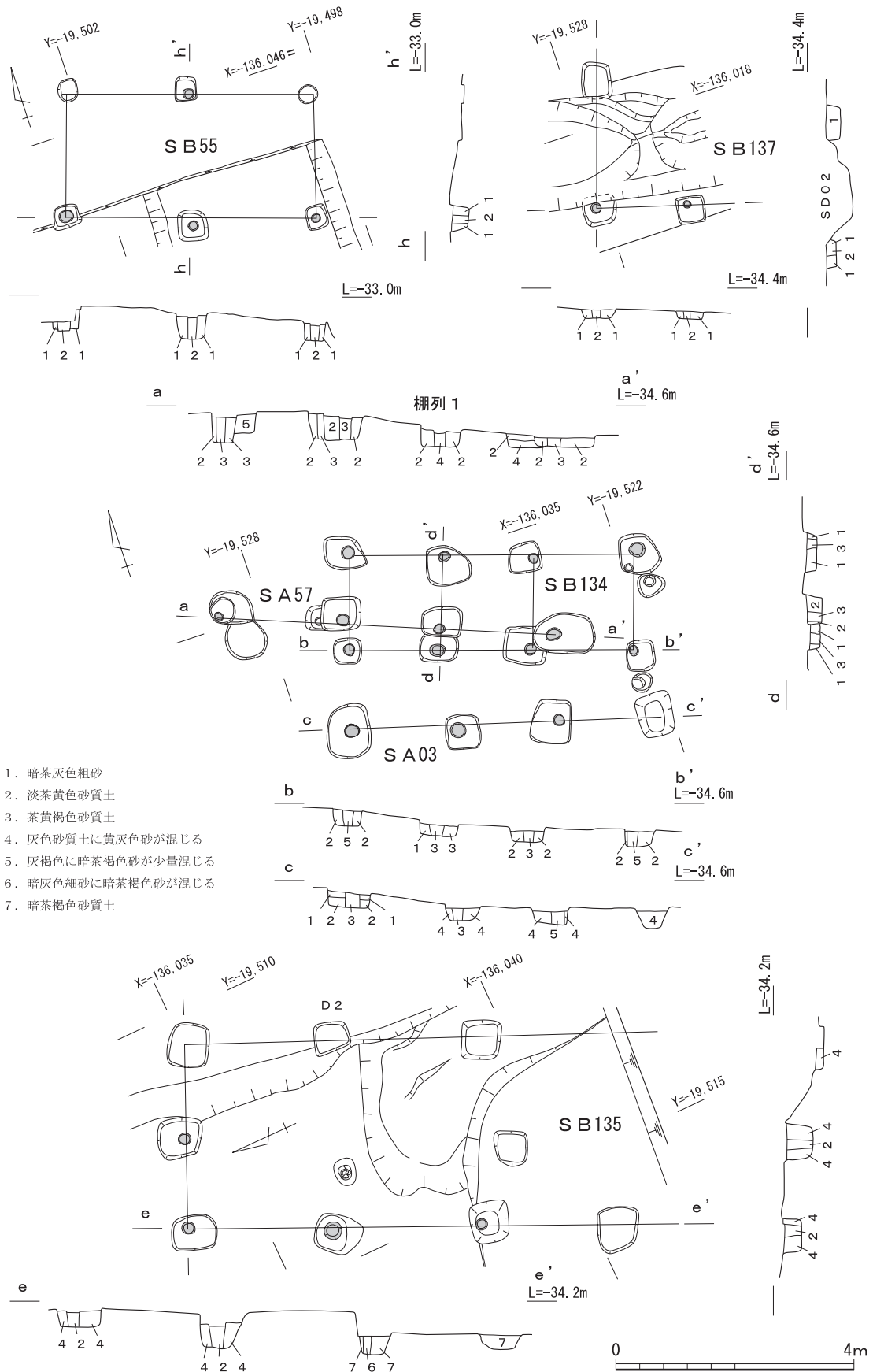
柱穴群(第10図) 調査区の中央から南部にかけて多数の柱穴の分布がみられた。多くの柱穴は直径が0.2～0.3mで、深さも0.1～0.3mとばらつきがみられる。一部の柱穴から中世段階の土器が出土している。建物に伴う柱穴も存在するとみられるが、建物の復原はできなかった。

土坑 S K 95 調査区南端で検出した土坑である。遺構の南部は調査区外に延び、全容が不明である。検出範囲にみる土坑の形状は、西壁側がやや弧を描くのに対し、北壁は直線的である。壁面の立ち上がりは緩やかである。底面は水平に近く、埋土は暗灰色粘質砂である。全長約6m、調査区南壁での深さは検出面から約0.2mを測る。埋土中から瓦器椀(第21図37)のほか、須恵器、土師器の出土をみた。

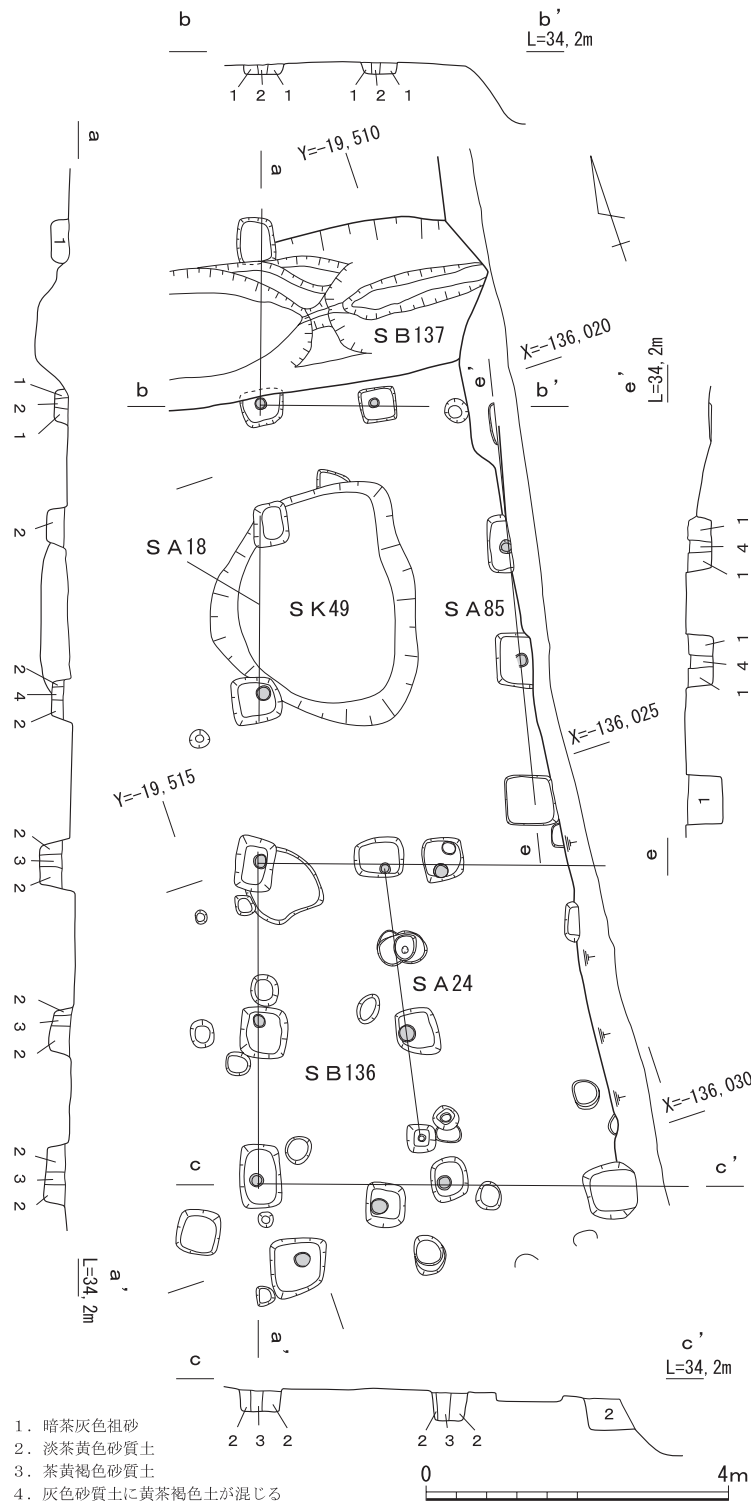
土坑 S K 82(第10図) S B 133の西側で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長さ2.1m、幅1.5m、深さ0.15mを測る。埋土は茶褐色砂質土であるが、遺物の出土はみられない。



第11図 下馬遺跡D 1地区遺構平面図



第12図 下馬遺跡D1地区掘立柱建物跡SB55・134・135・137実測図



第13図 下馬遺跡D1地区掘立柱建物跡S B136・137、
 柵列S A18・24・85実測図

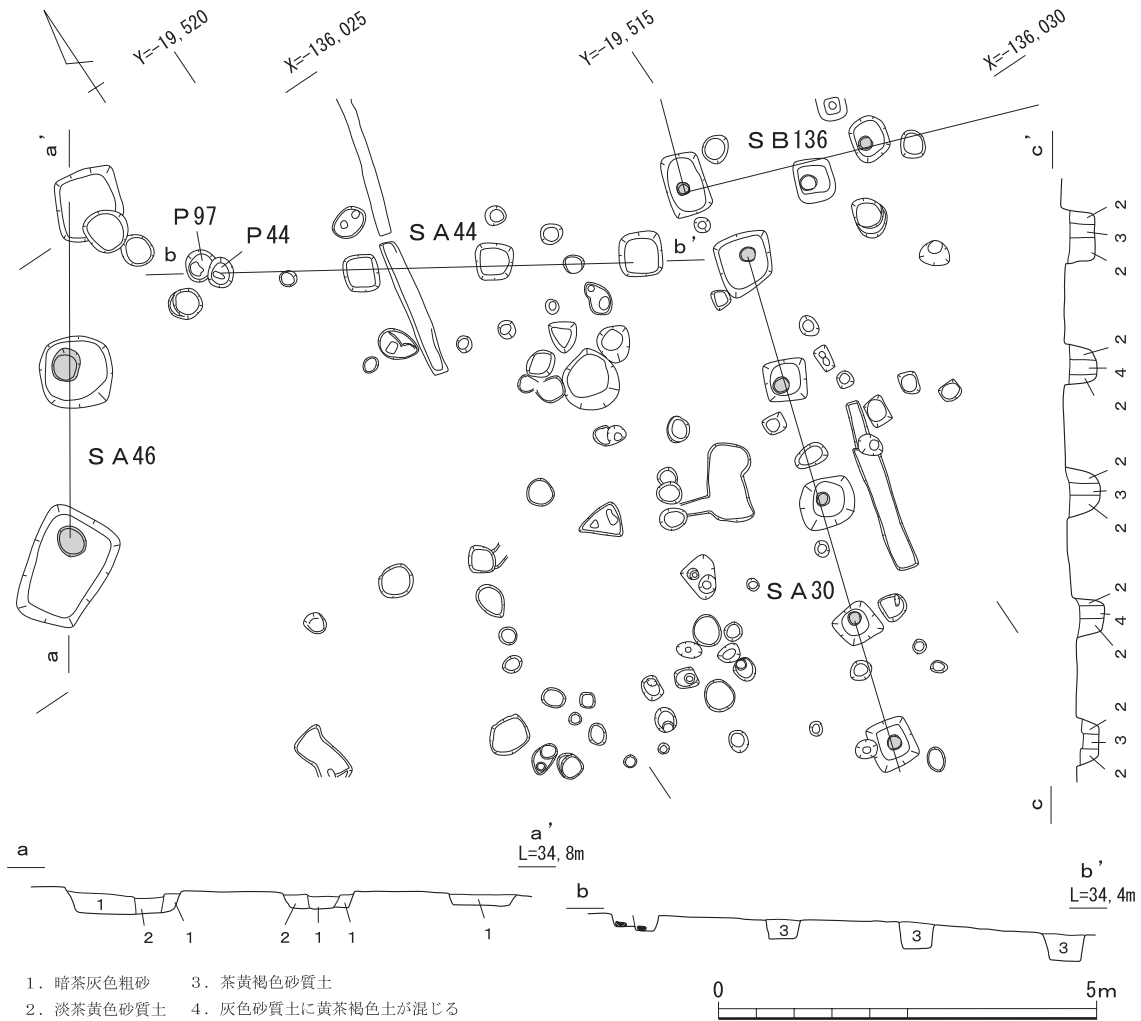
素掘り溝群 調査区の中央部付近に小規模な溝が多数存在した。溝幅は約0.2～0.3m、深さは0.1m前後である。埋土は茶灰色砂質土で、瓦器や土師器の小破片が出土した。

(5) D1地区

多数の柱穴、掘立柱建物跡、柵列、井戸、土坑を検出した。

掘立柱建物跡S B 134(第12図) 調査区の南東部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物規模は東西3間(4.8m)×南北1間(1.7m)を測る。東西の桁行柱間は1間約1.5mの等間隔を測るが、東端の1間のみ1.7mでやや長い。柱穴の掘形は方形であるが、不整形なものも存在する。柱穴の規模は一辺が0.5～0.7m、深さ0.3m前後を測る。S B 134の方位は北から東に約18°振る。梁間が1間であることから、片屋根の建物とみられる。S B 134は、当初、建物跡南側から検出した柵列S A 03を含めて2間×3間の総柱建物跡と考えていた。しかし、調査を進める過程で方位と柱間隔の相違が明らかとなり、S B 134とS A 03は別の遺構と判断した。

掘立柱建物跡S B 135(第12図) 調査区南東で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物規模は梁間2間(約3.0m)×桁行3間(約7.2m)以上を測る。桁行は建物跡の南部が調査区外に延びることから、全長は不明である。桁行柱穴は1間が2.4mの等間隔を測る。建物跡S B 134とは東に約6m離れた位置関係にあり、S B 135の主軸方位は、北から東に約23°振る。柱穴掘形は方形



第14図 下馬遺跡D1地区柵列S A30・44・46実測図

で、一辺約0.7m、深さは深いもので約0.6mの規模を測る。柱穴埋土は暗茶褐色砂質土である。

掘立柱建物跡 S B 136(第13図) S B 135の北側で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の東部は、後世の大規模な削平を受け失われている。建物跡は、西端から東に桁行3間(約4.8m)以上、南北の梁間は2間(4.3m)の規模を測る。柱穴の掘形は方形と長方形プランで、一辺約0.5～0.9m、深さ約0.4m前後の柱穴が多数を占める。建物跡の方位は、南西に位置するS B 134と座標軸が同一であり、関連性が認められる。S B 134とS B 136の位置関係は、S B 134東端からS B 136西端間は約3.6m、S B 134北端からS B 136南端間が約8.8m離れている。

掘立柱建物跡 S B 137(第13図) 調査区北東部で検出した掘立柱建物跡である。検出範囲は建物跡南西角を基点に、南北1間(2.1m)×東西1間(1.5m)分である。柱穴の掘形は方形プランで、一辺約0.5m、深さ約0.15mを測る。建物跡の方位はS B 134・136と同じで、北から東に約18°振っている。S B 137とS B 136の位置関係は、建物跡の間隔が南北で約6.0mを測り、S B 136の西側梁間柱穴列とS B 137の西側桁行柱列が同一線上に乗る。

柵列 S A 03(第12図) 調査区南西の掘立柱建物跡S B 134の南側で検出した柵列である。S A 03は東西3間で全長約5.3mを測る。S B 134とは方位がやや異なり、北から東に約16°振る。S

B134との方位差は約 2° である。S A03の西端はS B134の西端梁間と軸線を合致させるが、東端の柱穴はS B134東側梁間軸線から東に出ている。S B134との間隔も西端で約1.5m、東端では約1.0mと間隔が狭くなる。柱穴掘形は方形プランで、一辺約0.5mで深さは約0.3mを測る。

柵列S A18(第16図) 柵列S A85の西側に位置する南北1間(2.4m)の柵列である。掘立柱建物跡S B136とS B137の西側梁間柱穴列を結ぶ直線上に乗り、両建物跡とはほぼ等間隔にある。S A85とは約3.3mの間隔が開き、S B136・137の建物跡との関係から、建物間には南北約6.0m×東西2.4mの方形の空間が存在するようである。奈良時代の土坑S K49を切っている。

柵列S A24(第13図) 調査区の中央東部、掘立柱建物跡S B136に重複して検出された、南北方向の柵列である。柵列は4間(約5.2m)の規模を測り、方位は北から東に約 12° 振る。S B136の柱穴と切り合いが無く、S B136との先後関係は不明である。柱穴規模は一辺約0.5m、深さ約0.3mである。

柵列S A30(第14図) 調査区の南東部、掘立柱建物跡S B136の西端からやや南に下って検出された柵列である。南北方向に延びる柵列は4間で、全長は約6.8mを測る。柱間はほぼ1.7mの等間隔である。柱穴掘形は方形プランで、一辺約0.6m、深さ約0.5mを測る。柱穴埋土は暗茶褐色砂質土である。柵列の方位は掘立柱建物跡S B134・136とほぼ同一である。S A30の南端はS B134北東角から東に4.2m離れた位置に当たる。

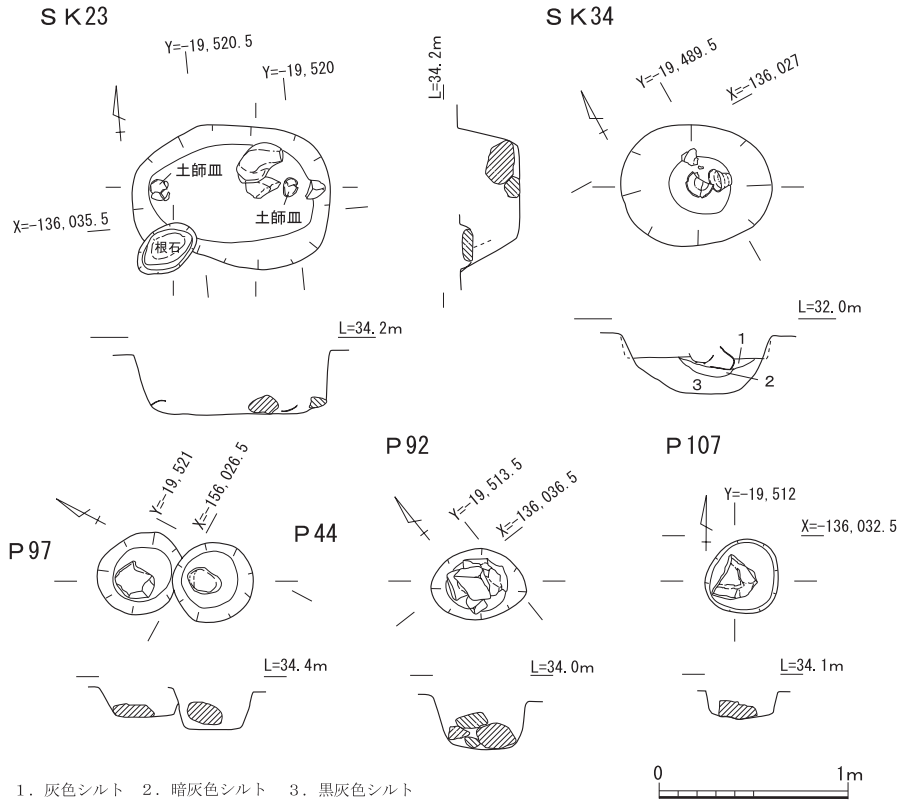
柵列S A44(第14図) 掘立柱建物跡S B136の南西部で検出した柵列である。柵列は北西から南東方向に延び、全長は3間(約5.5m)の規模を測る。柱穴掘形は方形と円形のプランが混在し、規模は0.3～0.5mであり、柱穴間は約1.9mの等間隔である。柵列の方位は北から東に約 32° 振る。

柵列S A46(第14図) 調査区中央のやや西で検出した南北方向の柵列で、2間(2.4m)の規模を測る。柱穴掘形は方形で、一辺約0.9mである。深さは0.15mと浅い。柵列の方位は東側に隣接するS A44と同じく北から東に約 32° 振る。

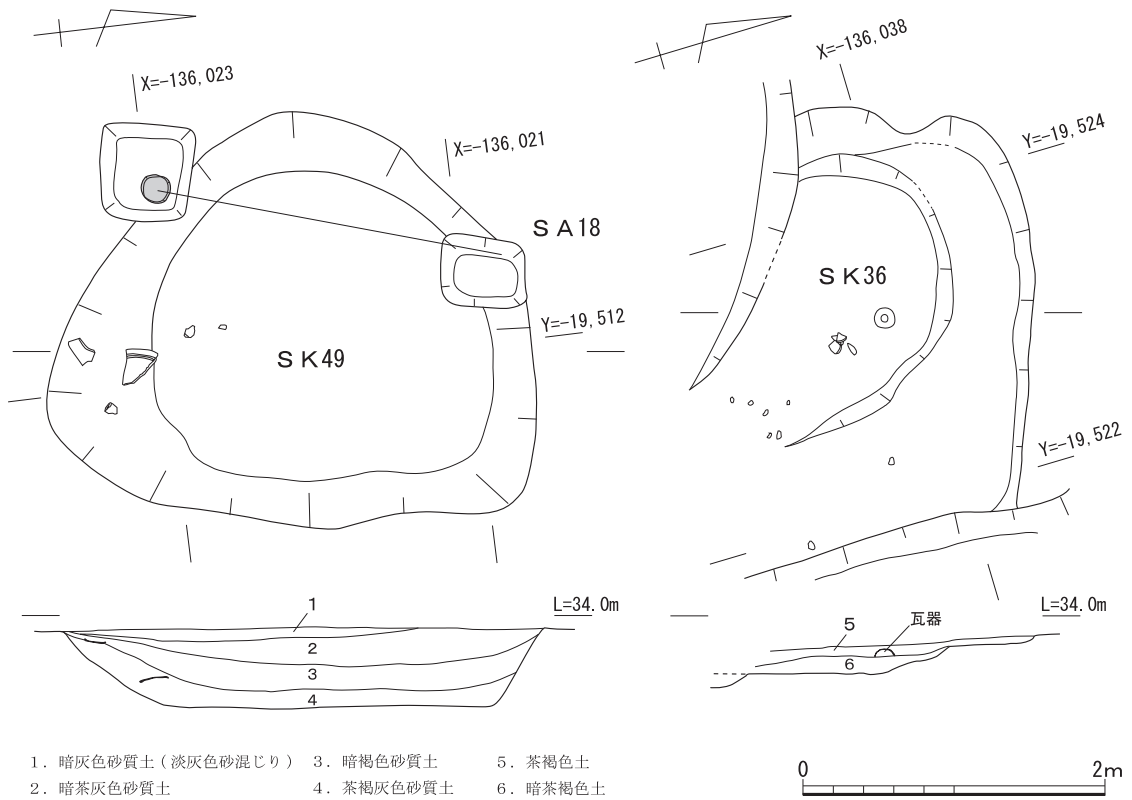
柵列S A57(第12図) 掘立柱建物跡S B134と重複する東西方向の柵列であり、S B134の柱穴に切り勝つ。柵列は4間(約7.6m)の規模を測り、柱穴間隔は1.8～2.0mを測る。柱穴は方形プランで、0.6～0.8mを測る。深さは0.6m前後である。柵列の方位は北から東に約 22° 振る。

柵列S A85(第13図) 掘立柱建物跡S B136とS B137の間から検出した柵列である。S A85は3間(約5.0m)の規模を測る。柵列の北部は後世の攪乱で延長部を確認できないが、S B137と同時期の柵列ならば、S A85はS B136とS B137の間にそのままおさまる状態にある。

溝状遺構S X02(第11図) 調査区の北端で検出した東西方向に直線的に延びる遺構である。遺構の東端部は東側に隣接するD2区まで及んでいる。この遺構は検出時点では形状や埋土の状況から溝とみていたが、溝を横断する土手を各所に設けている状況から、水を溜めることを目的とした遺構であることが判明した。S X02はD1区とD2区間が確認できないが、全長約30.2m、幅1.5～1.8mの規模を測る。S X02はおよそ5区画(1～5区)に仕切られ、区画の土手部分にはそれぞれに水口が存在する。S X02の各区画の長さは、西から順に第1区が約4.5m、第2区が約9.5m、第3区が約9.5m、第4区が約3.0m、第5区が約3.4mである。第3区と第4区間には土



第15図 下馬遺跡D1地区土坑S K23・34、柱穴P44・92・97・107実測図



第16図 下馬遺跡D1地区土坑S K36・49実測図

手が確認できないが、第4区は底面が大きく掘り下げられている。各区画の底面は平坦であるが、東に向かって緩やかに傾斜している。この傾斜は周囲の遺構面の自然傾斜と同じくしている。SX02の西端部には井戸SE01が存在する。SE01から汲み上げられた水は、第1区から第5区までかけ流しで水を溜めていたとみられる。東端の第5区の東壁はほぼ垂直に立ち上がって終わる。第1区から第3区までの深さは概ね0.3～0.4mであるが、第4区と第5区は約0.6mと深い。また、第4区と第5区では下層に暗灰色シルトが堆積し、常に滞水していた状況が窺える。主軸の方位は東から南に約10°振る。出土遺物では、第2区から瓦器椀(第21図57)と杯B(第21図58)の出土をみたほか、第5区から土師器皿・甕、瓦器、青磁(第22図86～90・94)の出土がある。

井戸SE01(第11図) SX02に関連する素掘りの井戸であり、SX02の西端部高所側に位置する。直径約1.0m、深さ約0.6mの規模を測る。井戸内には暗灰色粘質土が堆積し、現在も底面からの湧水が認められた。井戸内からは瓦器の出土がみられた。

土坑SK23(第15図) 掘立柱建物跡SB134の北東で検出した楕円形プランの土坑である。長さ約1.0m、幅約0.7m、深さ約0.3mである。土坑底は平坦で、10～20cm大の石3個のほか、土師器皿4点(第21図38～41)が出土した。土師器皿はそれぞれ2点がセットとなり、土坑底の東西に分かれて出土した。埋葬施設の可能性も考えられる。

土坑SK36(第16図) 調査区南東部、建物跡SB135と重複して検出した方形とみられる土坑である。土坑の東部と南部が後世の攪乱で失われ、全容は不明である。東西約2.6m以上×南北1.5m以上とみられる。底面は2段に下がり、2段目の上場は弧を描く。検出面からの深さは0.2mであり、埋土中から土師器皿と瓦器(第21図42～53)の出土をみた。

土坑SK49(第16図) 前年度の第21トレンチ調査で検出していた土坑である。埋土中から飛鳥時代とみられる移動式竈が出土している。

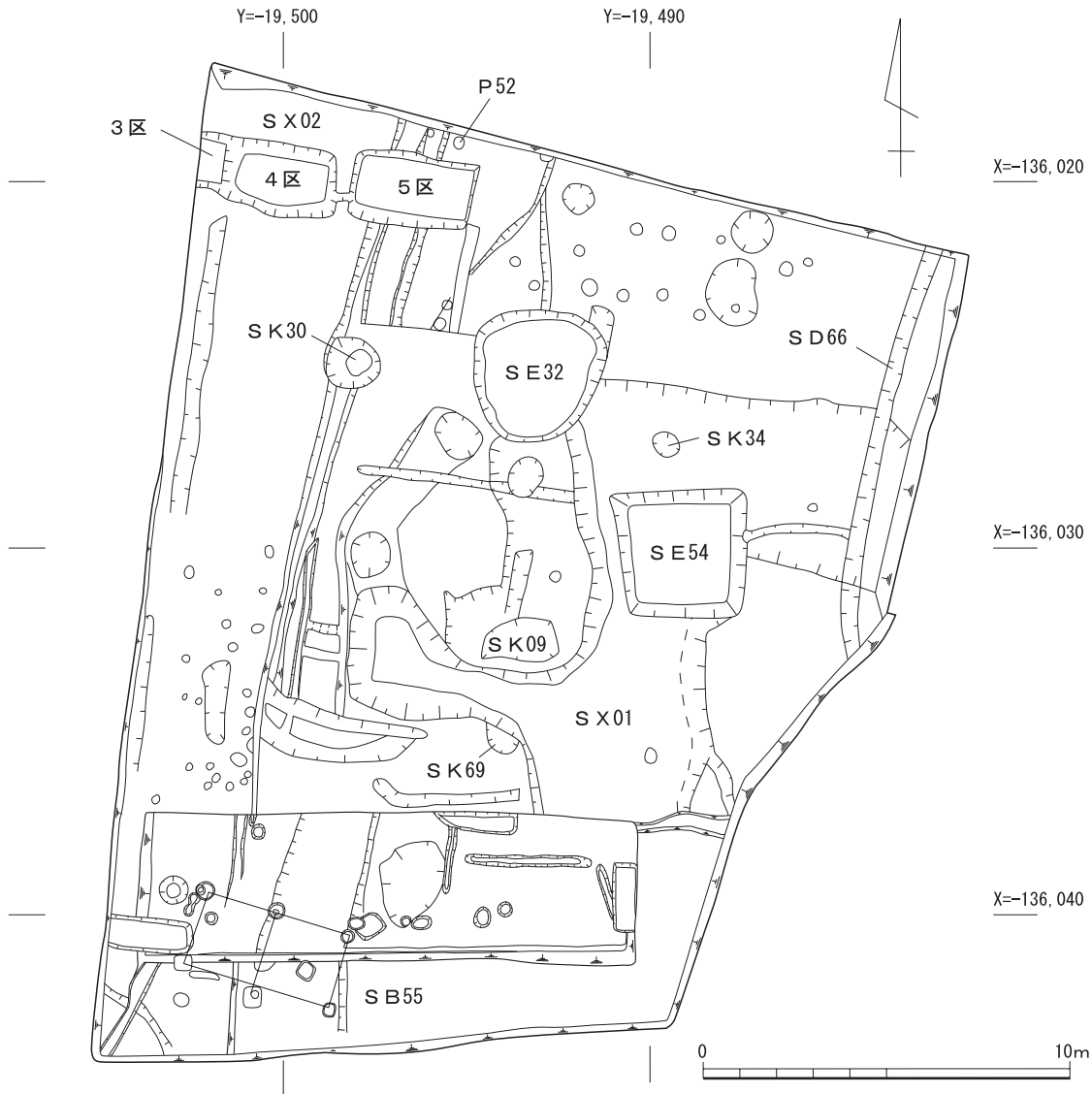
柱穴P44・92・97・107(第15図) これらは底面に根石が存在した柱穴である。いずれも柱穴プランは円形で、直径約0.4m前後の規模である。20cm程の平らな石を1個使用するが、P92は大小4個の石を底に充填している。P44は柵列SA44を構成する柱穴の1基である。

(6)D2地区

D1地区から東に続く溝状遺構SX02の、第4区と第5区が調査区の北西に存在する。そのほか、主要な検出遺構として、掘立柱建物跡1棟、井戸2基、溝、土坑2基等がある。

掘立柱建物跡SB55(第12図) 調査区南西で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物規模は東西2間(約4.2m)×南北1間(約2.1m)を測る。柱穴プランは方形と円形が混在し、規模も0.3～0.5mである。SB55の方位はD1地区のSB134と同じで、両建物跡の間隔は約20mである。

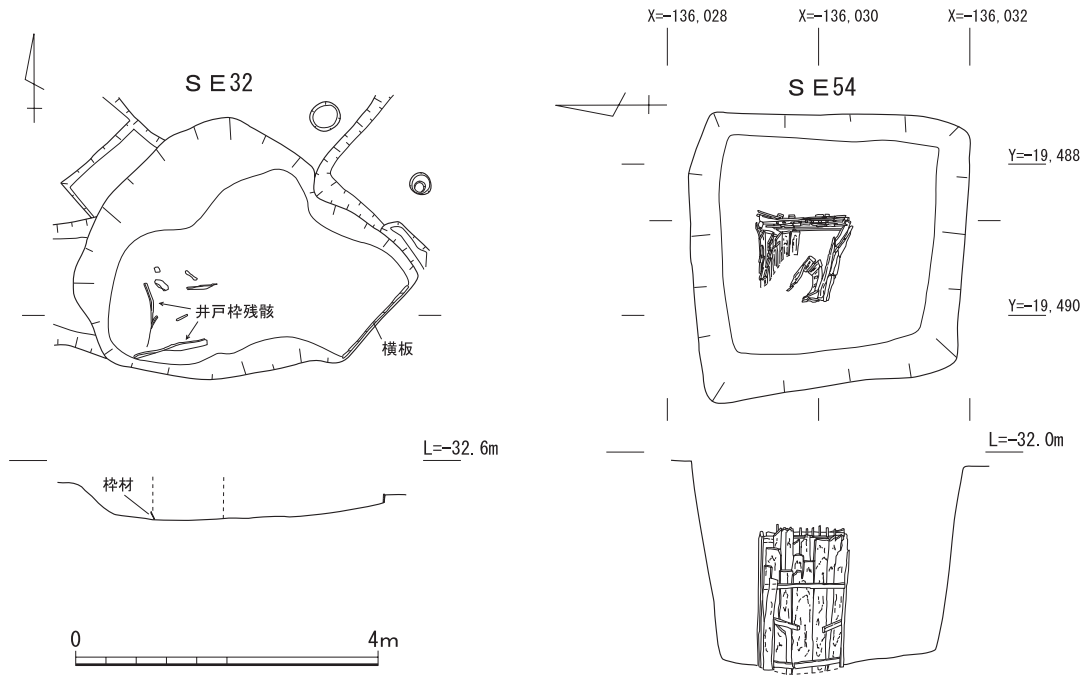
井戸SE32(第18図) 調査区中央北部、第11トレンチ調査で一部を検出していた井戸跡である。不定形の井戸掘形は、一辺約3.5m、深さ約0.5mの規模を測る。方形の井戸枠の残骸が、掘形の南西に存在し、最下段の横板が部分的に残っていた。掘形は元は円形とみられるが、掘形の北東部は方形的に突出する。東端部では掘形壁面に薄い板材が土留め状に設置されていた。この板材は長さ約1.3m、幅0.1mを測る。土留めの板材はSE32の造り替えがあったか、別の遺構に



第17図 下馬遺跡D2地区遺構平面図

伴うものか判別ができない。埋土は灰色の砂質土と粘質土が混在し、切り合い関係を示す痕跡は確認できなかった。埋土中から瓦器、土師器皿(第22図80～85)が出土した。

井戸SE54(第18図) 調査区の中央付近で検出した4本柱縦板横棧止めの井戸である。井戸掘形は方形プランで、一辺約3.6m、深さ約2.7mを測る。井戸枠は掘形中央からやや北西側に偏った位置にあり、一辺約1.1mの規模を測る。井戸枠の縦板には大小様々な板材が使用されており、底から約2.0mまでが残っている。土圧により北側と南側の枠材が井戸中央まで押し寄せられていた。四隅の柱は一辺約10cmの角材が使われている。また、上下約0.5m間隔で渡された横棧には、約6cm角の角材が使われていた。隅柱と横棧は柄と柄穴で固定されている。井戸枠の西側と南側の縦板には厚さ約3cmの板が多数使用されていたが、東側と北側の縦板には厚さ約5mmの薄い板材数十枚を幾重にも重ねていた。この薄い板材は幅12cm前後の板が多数を占め、長さも1.2～2.0mを越えるものもある。板材の上端は斜めに切られるものも多く、元の板材は更に長いものもあったとみられる。また、格子形の組物も縦板内に存在したことから、井戸枠には建築部



第18図 下馬遺跡D 2地区井戸S E 32・54実測図

材を再利用したと考えられる。井戸底は平坦で特に変化は認められない。掘形埋土は灰色系の粘土と砂質土であり、瓦器、土師器皿、白磁、蚊遣り(第22図91～93・95・96)が出土した。

土坑S K 09(第17図) 調査区中央で検出した楕円形を呈する土坑である。長さ約2.1m、幅約1.2m、深さ約0.2mの規模を測る。底面は平坦で、埋土は暗灰黄色の砂質土である。埋土中から土師器皿(第22図78・79)が出土した。

土坑S K 30(第17図) 調査区北西部で検出した円形の土坑である。前年度の第11トレンチで一部を確認しており、直径約1.5m、深さ約0.25mを測る。瓦器と土師器の破片が少量出土した。

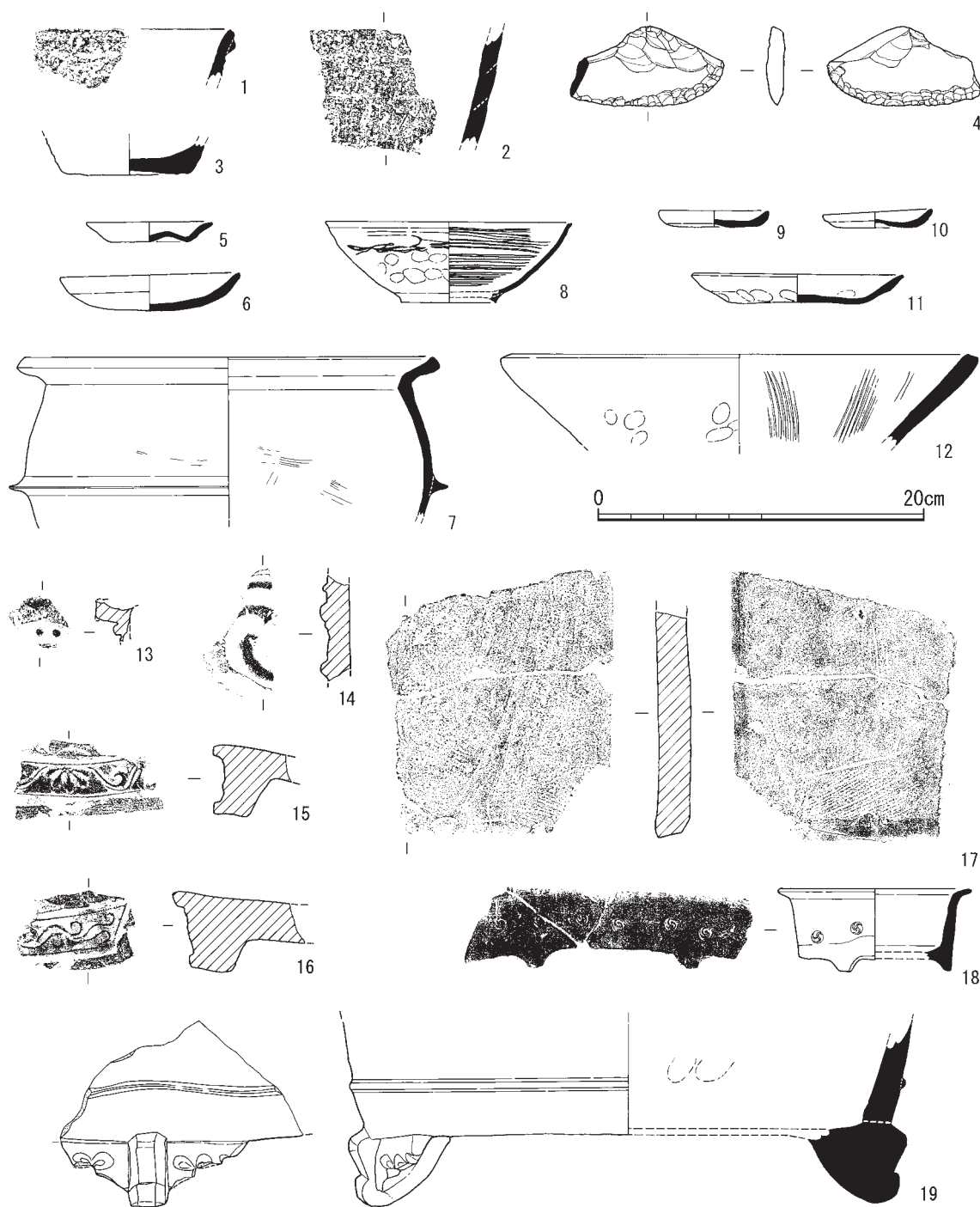
土坑S K 34(第15図) 第11トレンチ調査で検出していた土坑であり、井戸S E 54の北側に位置する。掘形は楕円形を呈し、長さ約0.8m、幅約0.6m、深さ約0.3mの規模を測る。土坑底は丸底である。土坑内埋土は下層に黒色シルト、上層には暗灰色砂が堆積する。この上層の下面付近から瓦器椀、土師器鉢が出土した。

土坑S K 69(第17図) 調査区の中央付近で検出した。落ち込みS X 01によって土坑の北部が切られる。残存長は約0.8m、幅0.7m、深さ0.15mの規模を測る。坑内から瓦器(第22図78・79)が出土した。

溝状落ち込みS X 01(第17図) 調査区の中央から東部にかけて、幅約3.5～5.0m、深さ約0.4mの溝状遺構を検出した。遺構は不定形に曲がりくねり、周壁の立ち上がりは急である。溝としては上流となる西側に遺構が続かず壁面の立ち上がりも不自然である。今回の調査では、このS X 01は大規模で不定形な落ち込み遺構として認識される。埋土は暗灰色・灰色の砂質土が堆積し、瓦器、土師器皿(第22図64・65・68・70～77)などが出土した。

3) 出土遺物(第19～22図)

今回の調査では、整理コンテナ38箱の遺物が出土した。平成21年度調査分が28箱で、平成22年

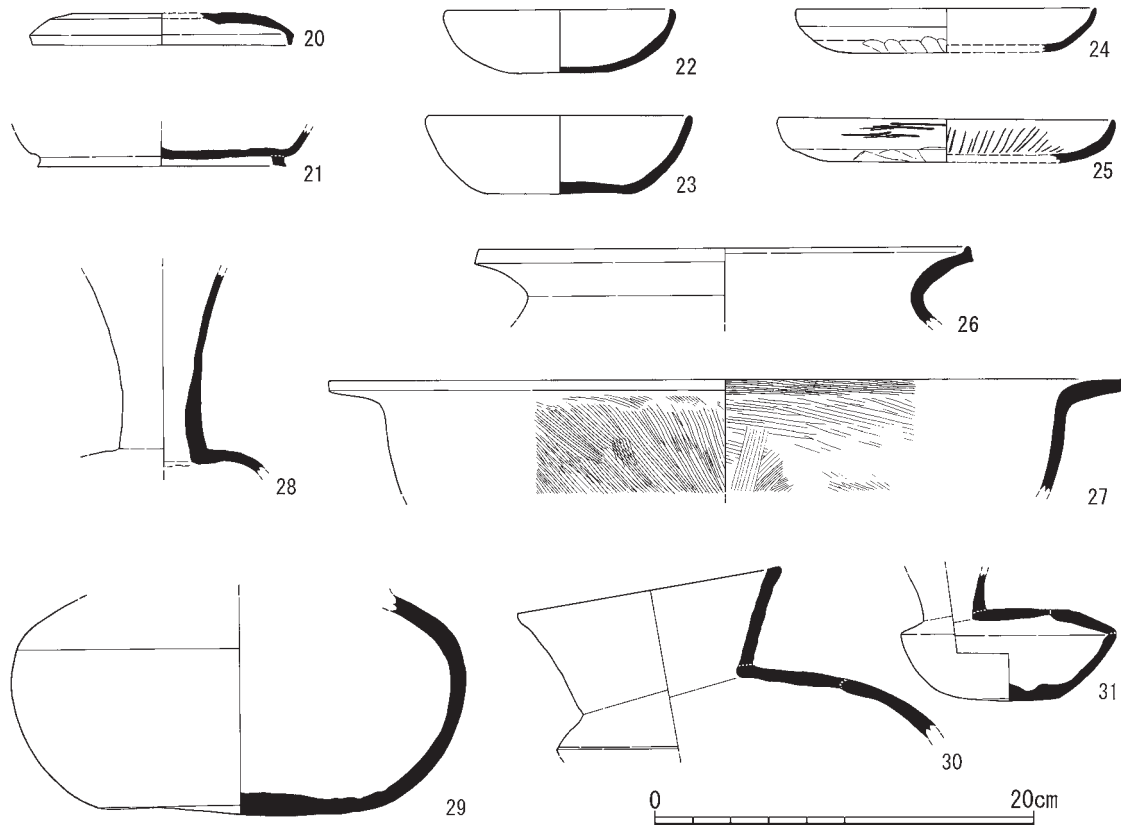


第19図 下馬遺跡A1地区出土遺物実測図

度前半期調査分が10箱である。出土遺物には縄文土器、石器のほか、大多数は奈良時代から室町時代にかけての土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦である。

(1) A1地区出土遺物(第19図)

1～3は、A1地区SR125から出土した縄文晩期の土器である。1は外面口縁部直下に刻み目を入れた突帯を巡らせる。4は、SR125の南岸の遺構面精査で出土したサヌカイト製の石匙である。下端の刃部は両面調整である。



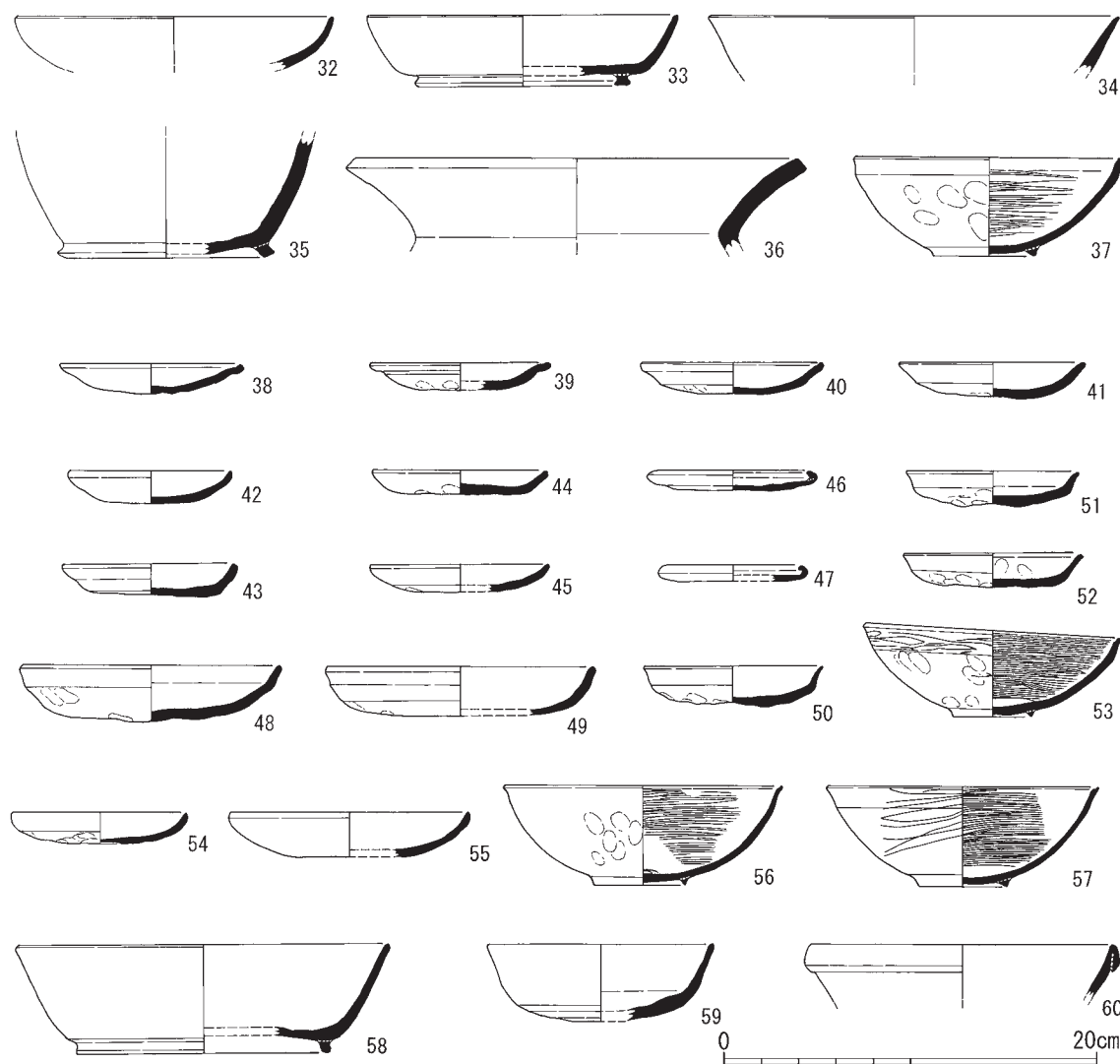
第20図 下馬遺跡A3・B1地区出土遺物実測図

5～19は、A1地区の各遺構から出土した14～15世紀の年代観の土器と瓦である。5～7は、瓦溜りS X120から出土した土師器皿(5・6)と土師質羽釜(7)である。8～12・19は、土坑S X12から出土した瓦器椀(8)と土師器皿(9～11)、瓦質播鉢(12)・火舎(19)である。火舎は縁飾りを施す短脚が付く。13～17は、瓦溜りS X120から出土した軒丸瓦(13・14)・軒平瓦(15・16)・平瓦(17)である。出土した軒丸瓦はすべて巴文である。2点の軒平瓦は均整唐草文軒平瓦である。18は、土坑S K07から出土した土師質の火舎である。口縁は短く外反させ、底部3か所に短い短脚が付く。口径11.9cm、器高5.0cm、脚高は0.8cmである。体部外面には不規則ながらも三つ巴文を巡らしている。この巴文は印刻で、直径は0.8cmを測る。

(2) A3・B1地区出土遺物(第20図・第22図67)

20～31はA3地区の河川跡S R16から出土した遺物である。須恵器蓋(20)・杯B(21)、土師器椀(22・23)・皿(24・25)・甕(26)・鍋(27)、須恵器壺(28・29)・平瓶(30・31)などがあり、いずれも8世紀後半の年代観をもつ土器である。

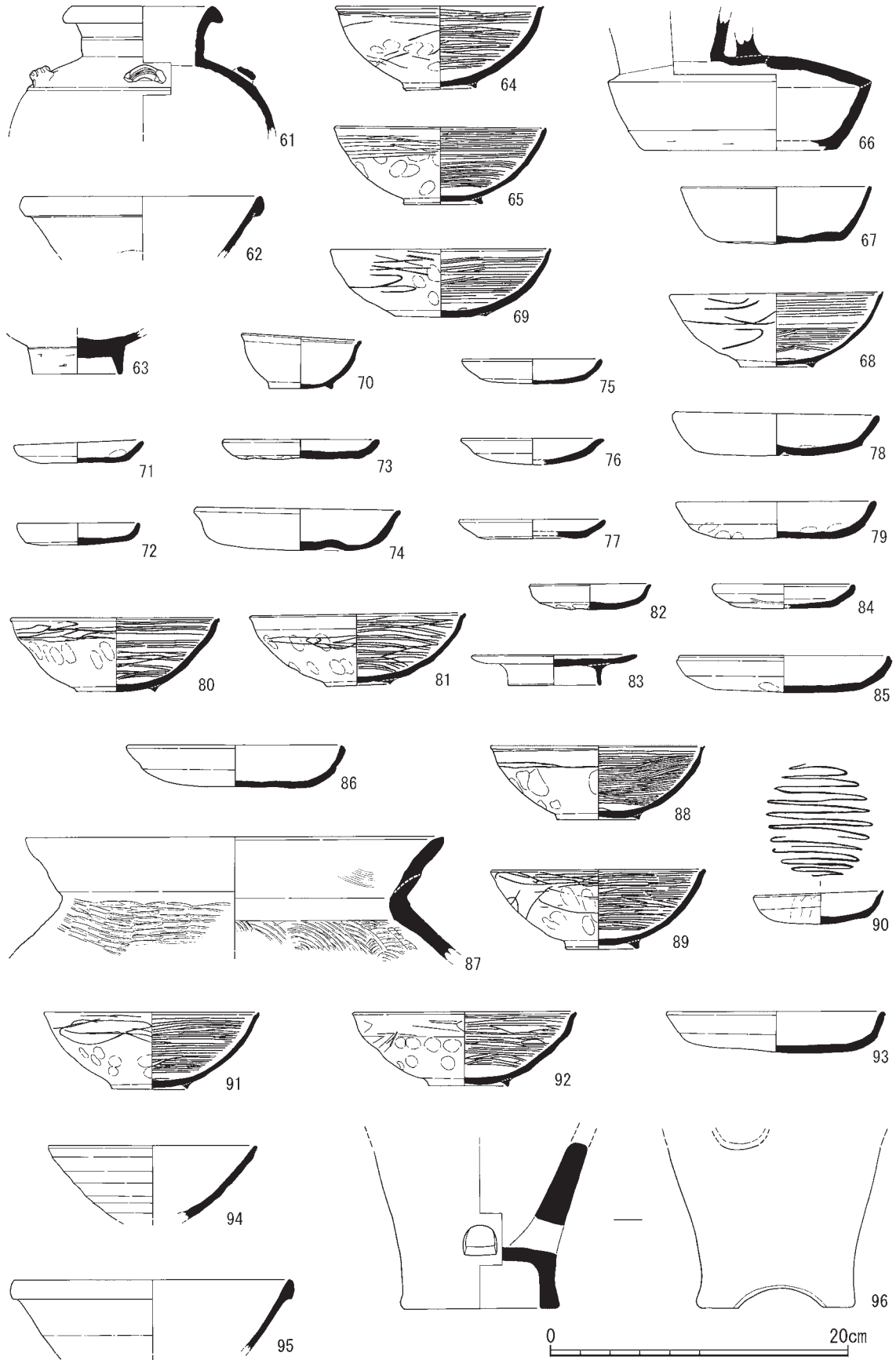
32～37・67は、B1地区の各遺構や包含層から出土した遺物である。土師器皿(32)と須恵器杯B(33)は、溝S D83から出土した。年代観は8世紀後半を示す。37は、12世紀後半の大和型瓦器椀と考えられ、S K95から出土した。67は、溝S D80から出土した8世紀後半の須恵器杯Aである。34～36は、調査区北東部に位置する拡張区の遺構面精査で出土した土器である。須恵器杯(34)・壺(35)・甕口縁(36)がある。



第21図 下馬遺跡D1地区出土遺物実測図

(3) D1地区出土遺物(第21図)

38～60は、各遺構から出土した遺物である。38～41は、土坑S K23から出土した11世紀後半の土師器皿である。形骸化した「て」の字状口縁端部の内上方への突起は弱い。口径は10cm弱である。42～49の土師器皿と50～53の瓦器は、土坑S K36から出土した12世紀後半の土器である。46はコースター型の皿である。50～52は瓦器皿で、53は大和型の瓦器碗である。53の内面暗文は密に施す。54は、掘立柱建物跡S B135の北側で検出した柱穴P124から出土した土師器皿である。完形品であることから、祭祀に伴い埋納した可能性がある。55・56は、掘立柱建物跡S B135の内側で検出した柱穴出土の土師器皿(55)と瓦器碗(56)である。12世紀後半である。57・58は、溝状遺構S X02の第3区出土の瓦器碗(57)と須恵器杯B(58)である。57は大和型で、12世紀後半の年代観をもつ。58は8世紀後半頃のものである。59は、柵列S A57の柱穴P4から出土した須恵器杯Aである。年代観は8世紀初頭頃か。60は輸入陶磁器の白磁碗で、調査区南西部の柱穴P57から出土した。



第22図 下馬遺跡B1・D2地区出土遺物実測図

(4) D 2 地区出土遺物(第22図61～66・68～96)

61～64は、調査区南東部の包含層出土遺物である。61は、13世紀前半の輸入陶磁器の白磁四耳壺である。口径は9.7cm。丸みの強い肩部4か所に耳を付す。62・63は、輸入陶磁器で、白磁椀と底部である。64は、瓦器椀である。65は、S K 69から出土した12世紀後半の瓦器椀である。66は、調査区北端で検出した柱穴P 5から出土した、9世紀中頃の平瓶である。68～77は、S X 01から出土した瓦器椀(68～70)と土師器皿(71～77)である。70の小型の瓦器椀は、口径8.1cm、器高3.5cmを測る。S X 01出土のこれらの土器は、概ね12世紀後半から13世紀に属するものである。80～85は井戸S E 32から出土した遺物である。80・81は瓦器椀で、82は瓦器皿、83は台付皿である。口縁の立ち上がりは殆ど無く、直線的に外上方に短く延びて、端部は丸くおさめる。口径11.1cm、器高2.0cmである。84・85は土師器皿である。これらS E 32の遺物は、12世紀末～13世紀初頭のものである。86～90・94は、溝状遺構S X 02第5区出土の遺物である。土師器皿(86)、須恵器甕(87)、瓦器椀(88・89)・皿(90)、輸入陶磁器青磁椀(94)は、いずれも12世紀後半のものである。91～93・95・96は、井戸S E 54出土の遺物である。瓦器椀(91・92)、土師器皿(93)、輸入陶磁器白磁椀(95)、土師質蚊遣り(96)がある。96の蚊遣りは、井戸掘形の上層から出土した。底部は上げ底(4.1cm)で、脚部は対面の2か所に半月状の繰り込みをもつ。体部下端に2cm×2cmのドーム状の窓(空気穴)を1か所設ける。体部上半を失うが、肩部付近に存在する4か所の穴の一部が残っていた。この穴は、燻す草葉を支える金串等を渡したものとみられる。内部は炭火による煤の付着が認められた。残存範囲での高さは約11cm、体部幅は14.2cmを測る。

4) 小結

平成21年度の調査では、西から東に向かって下がる扇状地の各所で、多数の遺構・遺物を確認した。特に、丘陵裾に位置したA 1地区では、縄文時代晩期の河川跡を検出した。丘陵上の大福寺遺跡では過去にサヌカイト製石匙が出土していることから、丘陵上を含む周辺部に、縄文時代集落が存在する可能性が高まった。また、A 1地区では、井戸、土坑、炉跡、瓦溜り等の遺構のほか火舎や中世瓦の出土から、何らかの宗教施設が付近に存在すると考えられる。丘陵上には大福寺の小字名が知られるが、検出遺構との因果関係は明らかではない。

奈良時代では、A 3地区から8世紀後半の遺物を含む河川跡(S R 16)と橋脚(S X 57)を検出した。さらにB 1地区では溝S D 83のほか、同時期の建物跡の可能性もあるS B 132・133がある。

平安時代ではD 1～D 2地区にかけて、11世紀後半から13世紀に属する多数の遺構を検出した。なかでも中心となるのは12世紀後半である。B 1・D 1・D 2地区から検出した建物跡と柵列は、その軸線の方向性から概ねA群～D群の4群に大別できる。真北からの振れにより、A群は北から東に約12°振るもので、柵列SA24が該当する。また同一方位として、やや離れたA 2地区のS B 58がある。B群は北から東に約16～18°振るもので、S B 55・132～134・136・137の6棟と柵列S A 03・30・85の3基である。C群は北から東に約22～23°振り、建物跡S B 135と柵列S A 57がある。D群は北から東に約32～40°振るもので、柵列S A 44・46の2基が該当する。軸線

の傾きは時期差を示すと考えられる。ちなみにB群の柵列S A57の柱穴がC群の掘立柱建物跡S B134の柱穴に切り勝ち、B群がC群に先行する遺構群と判明した。D群はB群とC群との間で切り合い関係がなく、先後関係は不明である。特にB群は遺構数が他群より抜きん出ており、平安時代後期を中心とする遺構群の中で中心を占めるものであろう。丘陵裾部のA1地区では14～15世紀頃の瓦や香炉などが出土する遺構が集中した。室町時代頃には調査地周辺に寺院的な建物が存在したと考えられる。

掘立柱建物跡には、S B134・55など小規模な片屋根建物跡が存在する。また、柵列も多数存在するほか、区分けされた大規模な水溜め施設S X02の存在は、下馬遺跡が普通の集落では無く、何らかの特殊な性格をもった集落であったとみられる。今回の検出遺構と遺跡の性格を考えるに当たって、下馬の小字名と直結させて、寺院もしくは公的施設としての判断を行うには確証が得られない現時点ではできない。ただ、S B134・55を厩舎、S X02を水場としてみることも一考に値しよう。

4. 平成21年度片山遺跡の調査(第2次調査)

1) 調査概要(第2図)

今年度の調査は、前年度に続き調査対象地内に9か所のトレンチ(第3～6・22～26)を設定し調査を行った。第3～6トレンチの規模は、一辺約4m×5mである。第22～26トレンチの規模は、一辺約4m×6mを基本とした。

このトレンチ調査で遺構や遺物の出土が良好な第25トレンチについては、拡張して本調査を実施した(A1地区)。A1地区とした拡張範囲の面積は320㎡である。

トレンチ調査では、溝、柱穴を検出したトレンチも存在したが、多くは出土遺物も僅かな状況であった。ただし、前述の下馬遺跡に近い第25トレンチでは、方形掘形をもつ柱穴列や溝を検出したほか、奈良時代から中世の土器が出土している。

A1地区では調査区北部から重複する2棟の掘立柱建物跡(S B01・02)や溝、土坑、柱穴を検出した。第25トレンチで検出した柱穴列はそれ以上の繋がりが確認できなかった。この柱穴列は、平成22年度調査で、掘立柱建物跡S B03に伴う柱穴であることが判明している。

A1地区検出の掘立柱建物跡はいずれも部分的な検出であり、平成22年度のA2地区調査で建物跡の全容が確認できた。ここではトレンチ調査分について報告し、A1地区の調査成果については、平成22年度A2地区調査と合わせて報告する。

2) 検出遺構(第23図)

第3トレンチ 地表下1.8mまで灰色・青灰色の砂質土が堆積し、無遺物・無遺構であった。

第4トレンチ 地表下0.8mで灰色砂質土を検出。暗灰色粘質土を埋土とする数基の柱穴を検出した。柱穴は円形プランで、直径は約0.3m規模であった。出土遺物はみられなかった。

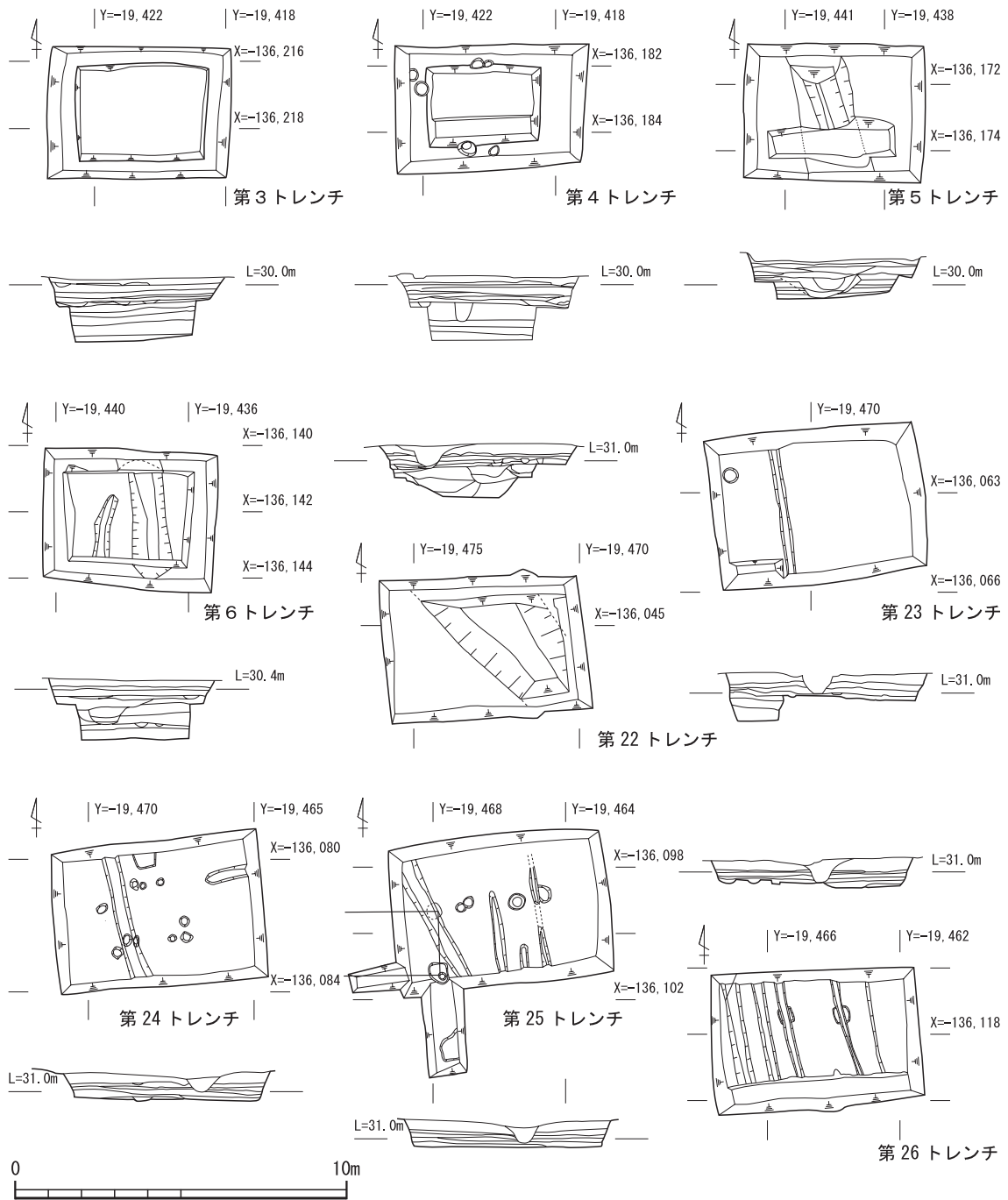
第5トレンチ 北西から南東に流れる溝跡を検出した。溝は幅約1.6m、深さ0.6mで、灰色砂が堆積していた。遺物は出土していない。

第6トレンチ 北西から南東に流れる溝跡を検出した。溝は幅約1.0m、深さ0.5mで、灰色砂が堆積していた。溝内から石包丁が出土した。

第22トレンチ 下馬遺跡D2地区の南東部に設定した。北西から南東に流れる、幅約2.6m、深さ約0.6mの流路跡を検出した。灰色系の砂・砂質土が堆積しており、遺物は出土していない。

第23トレンチ 第22トレンチの南に設けたトレンチである。地表下0.9mで遺構面とおぼしき安定地盤を検出したが遺構は検出できなかった。わずかに中世～近世土器が出土した。

第24トレンチ 第23トレンチの南に設けたトレンチである。中世の素掘り溝々のほか時期不



第23図 片山遺跡トレンチ実測図

明の小規模な柱穴が存在した。出土遺物は僅かである。

第25トレンチ 第24トレンチの南に設けたトレンチで、中世の素掘り溝々群のほか、時期不明の方形掘形の柱穴2基と、小規模な円形掘形の柱穴を検出した。奈良時代から中世の土器が出土した。

第26トレンチ 第25トレンチの南に設けたトレンチである。中世の素掘り溝群のほか、時期不明の柱穴を検出した。柱穴掘形は方形と円形プランがみられた。出土遺物は少ない。

3) 出土遺物

第6トレンチの溝埋土から粘板岩製の石包丁が出土したが、それ以外に中世～近世の土器の小破片が多数出土した。出土遺物の量は整理コンテナ1箱分である。

4) 小結

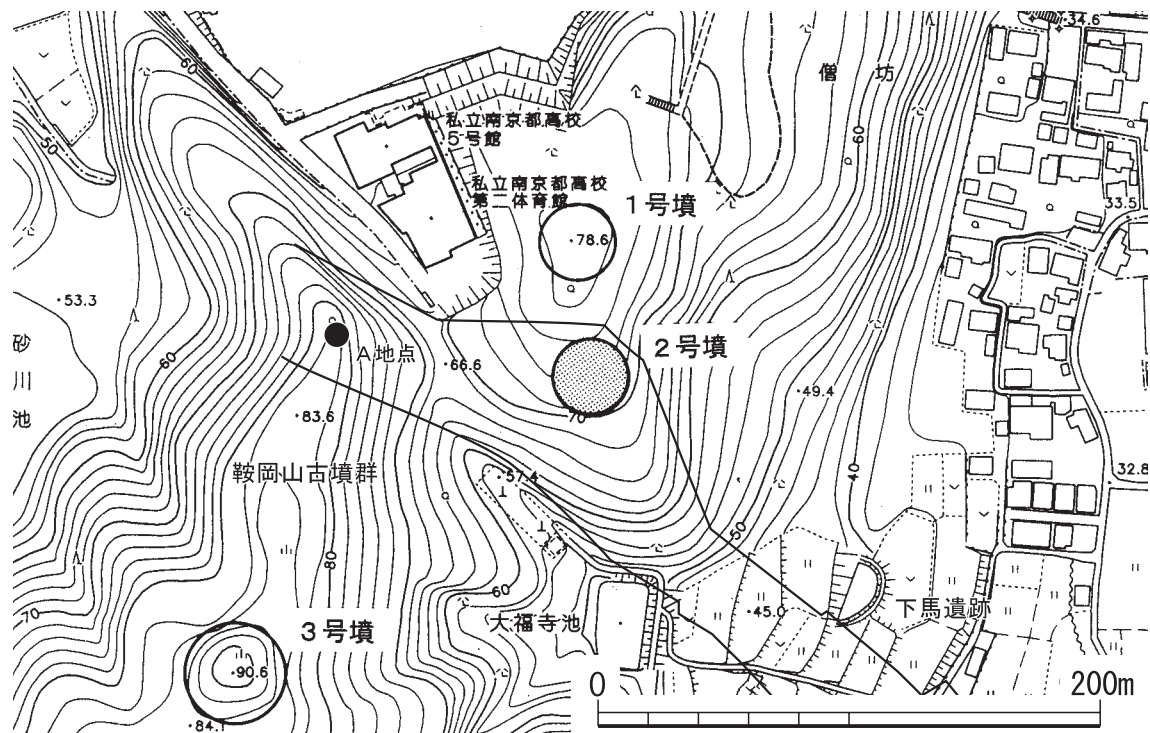
トレンチ調査の結果、片山遺跡の北部域である第25トレンチ付近に数棟の建物跡の存在を確認したことから、さらに周辺部に遺構が存在する可能性が高まった。他のトレンチでは溝、柱穴等の遺構がまばらである状況から、遺跡の主要遺構が周辺に存在する可能性は低いと考えられる。

5. 平成21年度鞍岡山古墳群の調査

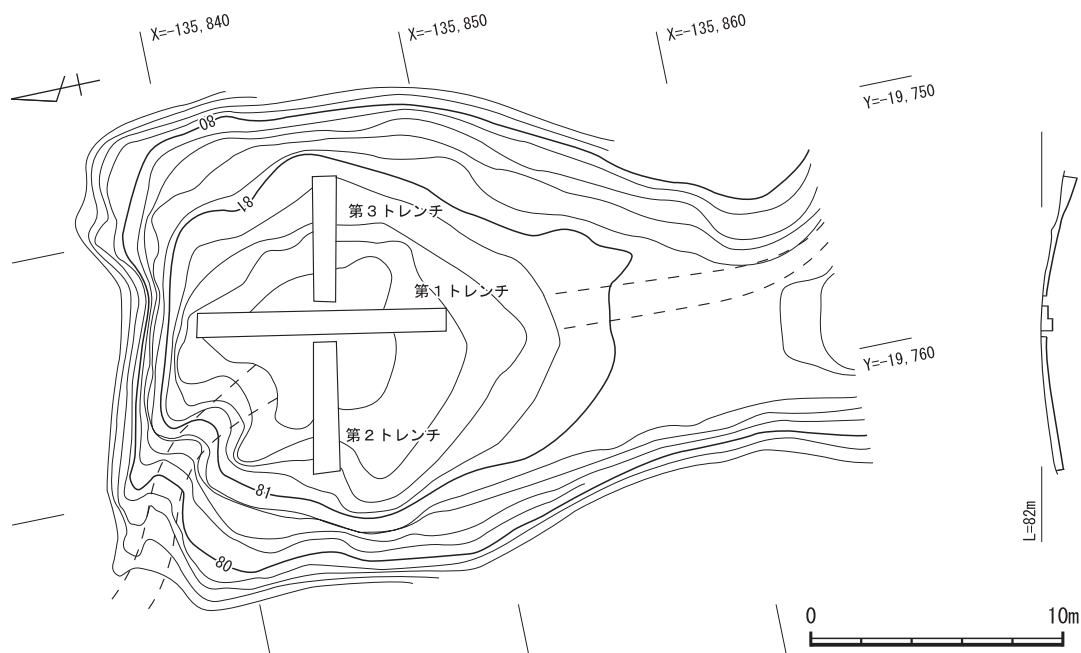
1) 調査概要

下馬遺跡背後の丘陵上に4基からなる鞍岡山古墳群が存在する。今回は2号墳の南西尾根筋先端をA地点とし、遺構・遺物の確認を目的としてトレンチ調査を実施した。A地点は支尾根の分岐点にあたり、直径約12m、高さ約1mの高まりから、古墳の可能性があった。

主尾根稜線に沿って長さ10m×幅1mの第1トレンチを設定した。また、尾根最高所において



第24図 鞍岡山古墳群A地点位置図



第25図 鞍岡山古墳群A地点トレンチ配置図

第1トレンチに直交する長さ5m×幅1mの第2・3トレンチを設定した。

調査の結果、表土層直下には地山が広がり、精査および断ち割りを実施して遺構の有無の確認を行なったが、全てのトレンチで遺構は検出できなかった。第2・3トレンチの斜面部には柔らかい黄茶色土の堆積がみられたが、遺物は出土していない。

2) 小結

鞍岡山古墳群A地点は自然地形であることが判明した。鞍岡山古墳群の4基は、いずれも墳丘高が2mを越える腰高の古墳である。1m前後の高まりや古墳として整っていない丘陵の高まりについては、古墳の可能性は低いと考えられる。

6. 平成22年度下馬遺跡の調査(第3次調査)

1) 調査概要

今回の発掘調査は、前年度に実施したD1地区から、農道を挟んだ南側に位置する。調査区は隣接耕作地への通路の関係から、D3地区とD4地区の東西2か所に分かれた。

西側のD3地区では、調査区の東部が後世の削平で大きく削り下げられていた。また、これは周辺の耕作地の段差と合致している。調査区西側は地表下約0.5m付近で黄褐色砂質土(石混じり)を検出し、10基ほどの柱穴を検出した。柱穴は0.2～0.4mの規模で円形プランである。また、調査区南東隅で井戸SE312を検出した。

D4地区は、遺構検出面は西から東に緩やかに下がる傾斜地であり、調査区西端と東端部の8m間での比高差は約0.3mを測る。調査区中央付近から南東にかけて、河川由来の灰色砂の堆積が認められた。この灰色砂の上面と除去後の下面の2面で柱穴、溝等の遺構が確認できた。この灰色砂中の土器には12世紀後半の瓦器椀、土師器、輸入陶磁器が含まれていた。砂層上面では、

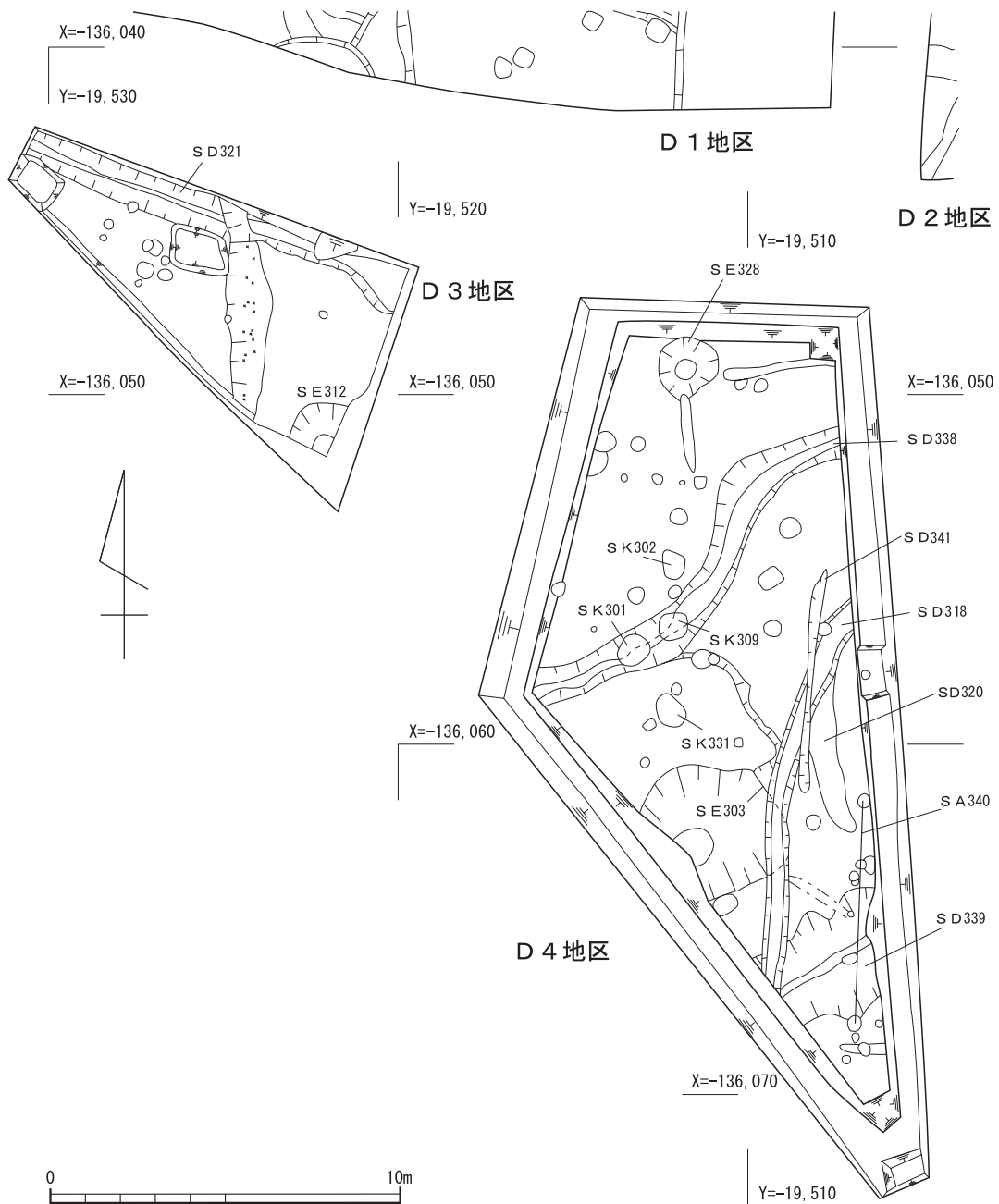
柵列(S A340)、溝(S D318・320・341)を検出した。また、下層面では、飛鳥時代の土坑(S K301)と井戸(S E303)、溝(S D338)、平安時代の溝(S D339)のほか、柱穴を多数検出した。

2) 検出遺構

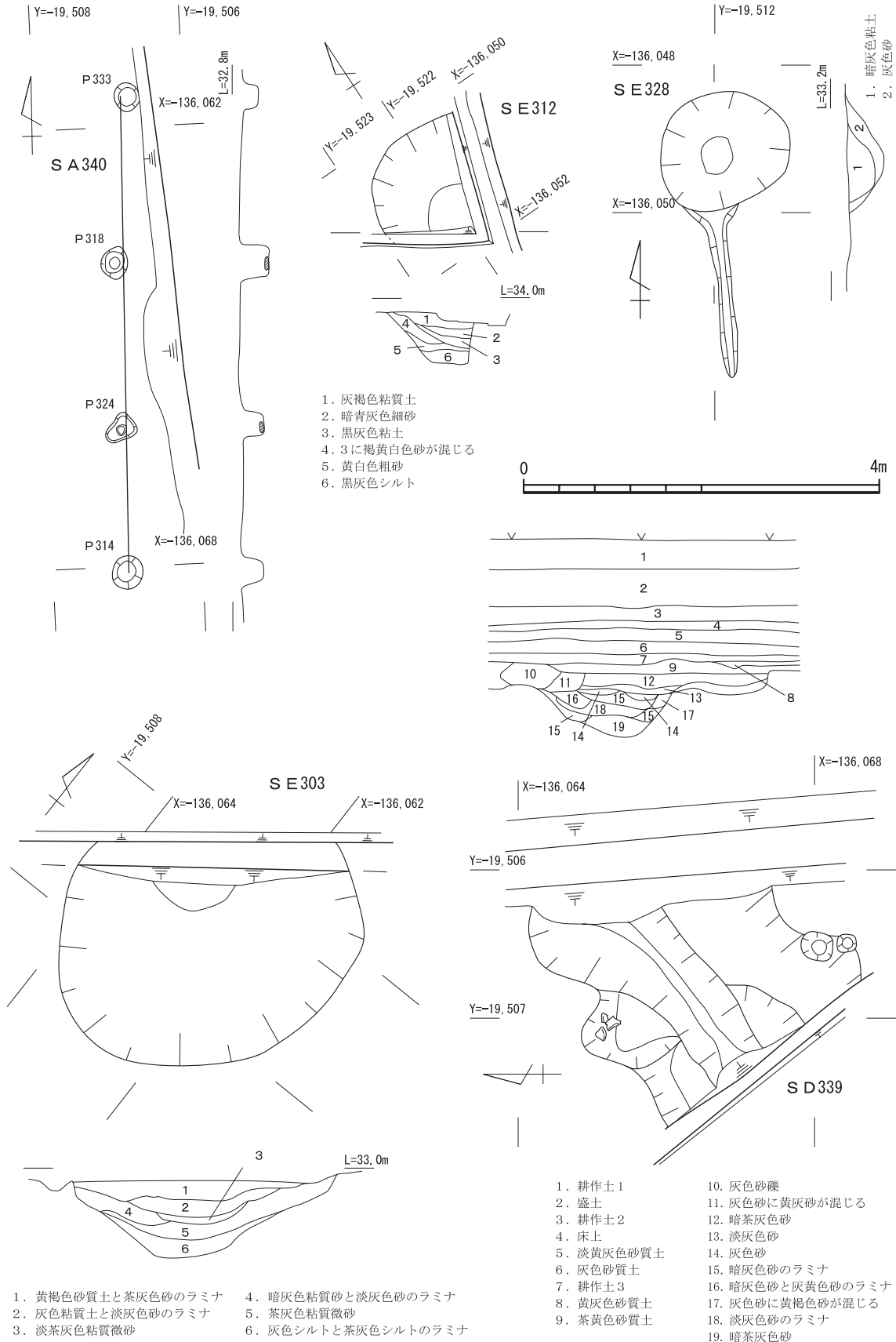
(1) D3地区(第26図)

近代溝 S D321 調査区北縁で検出した素掘り溝である。北側に存在した農道の側溝と判断した。

井戸 S E312(第27図) 調査区の南東隅で検出した素掘り井戸である。井戸の調査範囲は北西部4分の1である。井戸掘形は円形と考えられ、直径は3m程度と推測される。井戸の深さは検出面から約0.5mを測る。井戸内には暗灰色の砂・微砂が堆積し、瓦器碗の破片が出土した。時



第26図 下馬遺跡D3・4地区遺構平面図



第27図 下馬遺跡D 3・4地区柵列S A 340、井戸S E 303・312・328、溝S D 339実測図

代は12世紀末から13世紀とみられる。

柱穴 後世の掘削を免れた調査区西部から、9基の柱穴を検出した。柱穴掘形は円形で、直径は0.2～0.4mである。建物等の復原には至っていない。

(2) D4地区(第26図)

主要検出遺構として、調査区東部を覆う灰色砂の上面で検出した遺構には、溝3条(S D318・320・341)と柵列S A340がある。また、灰色砂の下面で検出した遺構には、井戸S E303、溝2条(S D338・339)、土坑2基(S K301・302)がある。

溝S D318 調査区南東部を南から北方向に流れる素掘り溝である。溝の南部はほぼ北に流れるが、中間部から北側は緩やかにその方向を東に振っている。溝幅約0.6m、深さ約0.2mを測り、検出した長さは約11mである。溝の埋土は黄色混じりの灰色粘質砂であり、少量の土師器皿、瓦器破片が出土した。土器は13世紀代とみられる。

溝S D320 S D318の北部東側で検出した素掘り溝である。溝幅0.7m、深さ0.1mを測る。切り合い関係、検出状況から、S D318に先行した旧溝の可能性が高い。

溝S D341 S D318の北部を切って南北に延びる溝である。溝幅0.2m前後で深さも浅い。無遺物でもあり、耕作関連溝とみられる。

柵列S A340(第27図) 調査区の南東端で検出した南北方向に延びる柱穴列である。掘立柱建物もしくは柵列とみられるが、調査区の東壁に沿って検出したことから周囲の状況が未確認のため、詳細は不明である。全長は3間(6.4m)を測る。柱穴掘形は円形で直径は約0.3～0.4mである。柱穴P318とP324では、底面に平らな根石が存在した。また、南端の柱穴P314では13世紀前半の瓦器碗(第28図114)が出土した。

井戸S E303(第27図) 調査区中央の南側で検出した素掘り井戸である。井戸の南西部が調査地外に位置する。井戸掘形は不定形ながらも円形とみられる。掘形の直径は約4.0m、深さ約0.8mを測る。掘形は播鉢状に中央部に向かって緩やかに下がる。埋土中から7世紀後半の土器(第27図107～110)が出土した。

井戸S E328(第27図) 調査区北部で検出した素掘り井戸である。井戸掘形は円形で、直径約1.7m、深さ約0.4mの規模を測る。井戸の埋土は灰色系の砂・粘質砂であり、瓦器片や土師器皿(第28図102～106)が出土した。土師器皿(102～106)は全て完形品であり、井戸祭祀に関連した遺物と考えられ、12世紀末～13世紀前半の年代観を示す。

溝S D338 調査区西角から蛇行しながら北東方向に流れる素掘り溝である。溝幅0.8～1.5m×深さ約0.3mの規模を測る。底面と壁面には、水流の影響とみる凹凸が多数存在する。溝中央付近から東部にかけての南岸は北岸より低まり、オーバーフローした灰色粘質砂の堆積が認められた。切り合い関係により、土坑S K301より先行する溝である。

溝S D339(第27図) 調査区南端付近で検出した、南西から北東方向に流れる素掘り溝である。溝幅約3.0m、深さ約0.8mの規模を測る。溝の下層から7世紀後半頃の土器(第27図97～99・101)が出土したほか、検出面直下から8世紀末頃の土師器皿(第28図100)が出土している。

土坑 S K 301 調査区中央付近、溝 S D 338の埋土を切って掘られた土坑である。方形に近い掘形は、一辺約0.6mで、深さは0.15mを測る。暗灰色粘質土の埋土中から、須恵器(第28図111・112)が出土した。

土坑 S K 302 土坑 S K 301の北東約2m付近で検出した土坑である。直径約0.8mの円形に近い土坑である。深さは0.2m前後である。暗灰色粘質土の埋土中から7世紀後半の須恵器杯(第27図113)が出土した。

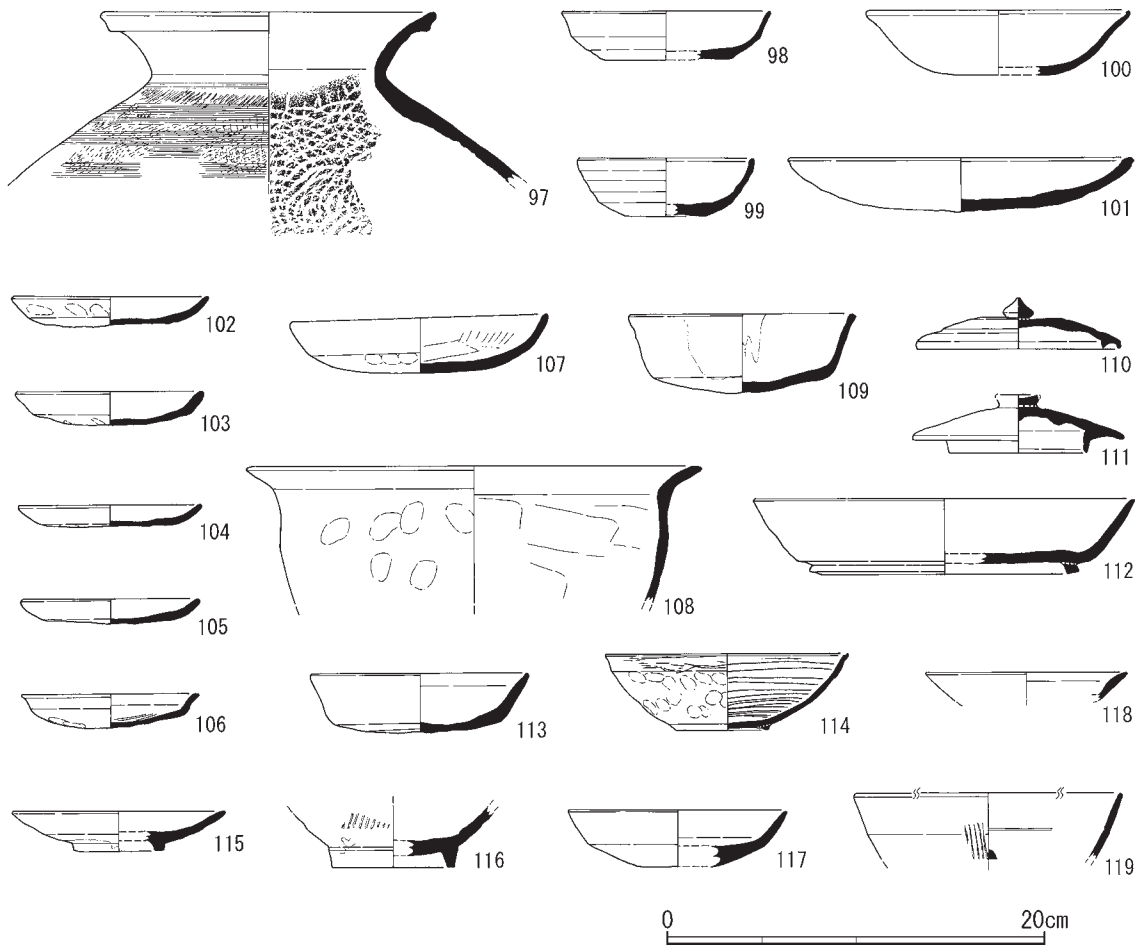
土坑 S K 309 土坑 S K 301の北東で検出した隅丸方形の土坑である。一辺約0.8m、深さ約0.2mを測る。土坑の掘形は溝 S D 338の埋土を切っている。少量の土師器が出土した。

土坑 S K 331 土坑 S K 301の南東で検出した楕円形の土坑である。長さ約1.0m、幅約0.7m、深さは約0.1mを測る。暗茶褐色粘質土の埋土中から土師器片が少量出土した。

3) 出土遺物(第28図97～119)

D 3 地区と D 4 地区の調査で出土した遺物は、整理コンテナ約10箱であった。なかでも D 4 地区からの出土遺物が大部分を占めている。

D 3 地区では井戸 S E 312の埋土から瓦器碗の破片が出土したが、図化に至らなかった。そのほか、溝 S D 321の下層から土師器や染付けが出土しているが、染付けは近代のものであった。



第28図 下馬遺跡D 3・4地区出土遺物実測図

97～101は、溝S D339から出土した。97～99は須恵器の甕と杯である。100・101は土師器皿である。102～106は、井戸S E328から出土した土師器皿である。107～110は、井戸S E303から出土した7世紀後半の土師器と須恵器である。107は土師器皿、108は土師器甕である。109の杯G内面には灯芯の油煙跡が残り、外面も一部に煤が付着する。灯明皿として使用された状況が窺える。110は須恵器杯蓋である。111・112は、土坑S K301から出土した8世紀末頃の土器である。111は須恵質の蓋で、口径11.3cm、器高は3.1cmを測る。天井部は直線的に下方に開き、口縁端部から内側2cmに返りをもつ。この返りは長さ約1.1cmで、真直ぐ垂下する。天井部には円柱状のつまみを付ける。合子か壺の蓋とみられる。112は須恵器杯Bである。113は、土坑S K302出土の須恵器杯Gである。114は、柵列S A340の柱穴P314から出土した、12世紀末～13世紀前半の瓦器椀である。115～119は、調査区東部の灰色砂層中から出土した輸入陶磁器である。115と116は白磁で、117～119は青磁である。12世紀末～13世紀前半の年代観を示している。

4)小結

下馬遺跡第3次調査では、D3地区とD4地区の調査を実施した。第2次調査では北側のD1地区からD2地区にかけて、12世紀後半を中心とする掘立柱建物跡や柵列、井戸など、多数の遺構が集中していた。今回のD3地区とD4地区でも同様な状況にあり、井戸S E312・328、柵列S A340など関連遺構の検出をみた。さらに新たな状況として、飛鳥～奈良時代の溝S D338・339、井戸S E303、土坑S K301・302を検出したことは、遺構の乏しかった同時期の下馬遺跡を考える上で新たな成果を得た。

7. 平成22年度片山遺跡の調査(第3次調査)

1)調査概要(第29図)

今回の調査地点であるA2地区は、前年度調査A1地区の西側に位置する。両地区に跨る遺構もあり、A1・2地区の検出遺構について報告を行う。

調査区のほぼ中央部では、南北方向の溝3条(S D64・203・204)を検出した。検出遺構の中では新しい時期の溝で、中世の時期と考えられる。同じ中央付近から4棟の掘立柱建物跡(S B01～04)を検出した。この建物跡群は、切り合い関係から先のS D64より時期が古くなる。また、調査区内には西から東方向に流れる東西溝(S D213・217・233)が存在し、このうちS D213とS D217は、切り合い関係からS B01とS B02より古い溝であった。そのほか多くの柱穴の検出をみたが、更なる建物跡の復原には至らなかった。また、調査区内には大小の土坑も存在した。

2)検出遺構

掘立柱建物跡S B01(第30図) 調査区中央付近で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡の規模は、桁行3間(5.1m)×梁間2間(3.6m)を測る。柱穴は方形の掘形であるが、歪な形の掘形、角の丸い掘形、長方形の掘形なども認められる。整った方形を呈した掘形では、一辺が0.5mを測る。掘形埋土の観察から柱痕跡を確認した。柱は円形で、直径は0.18m前後である。建物跡の南東角の柱穴は溝S D217を切るが、溝S D64には切られる関係にある。建物跡の方位は

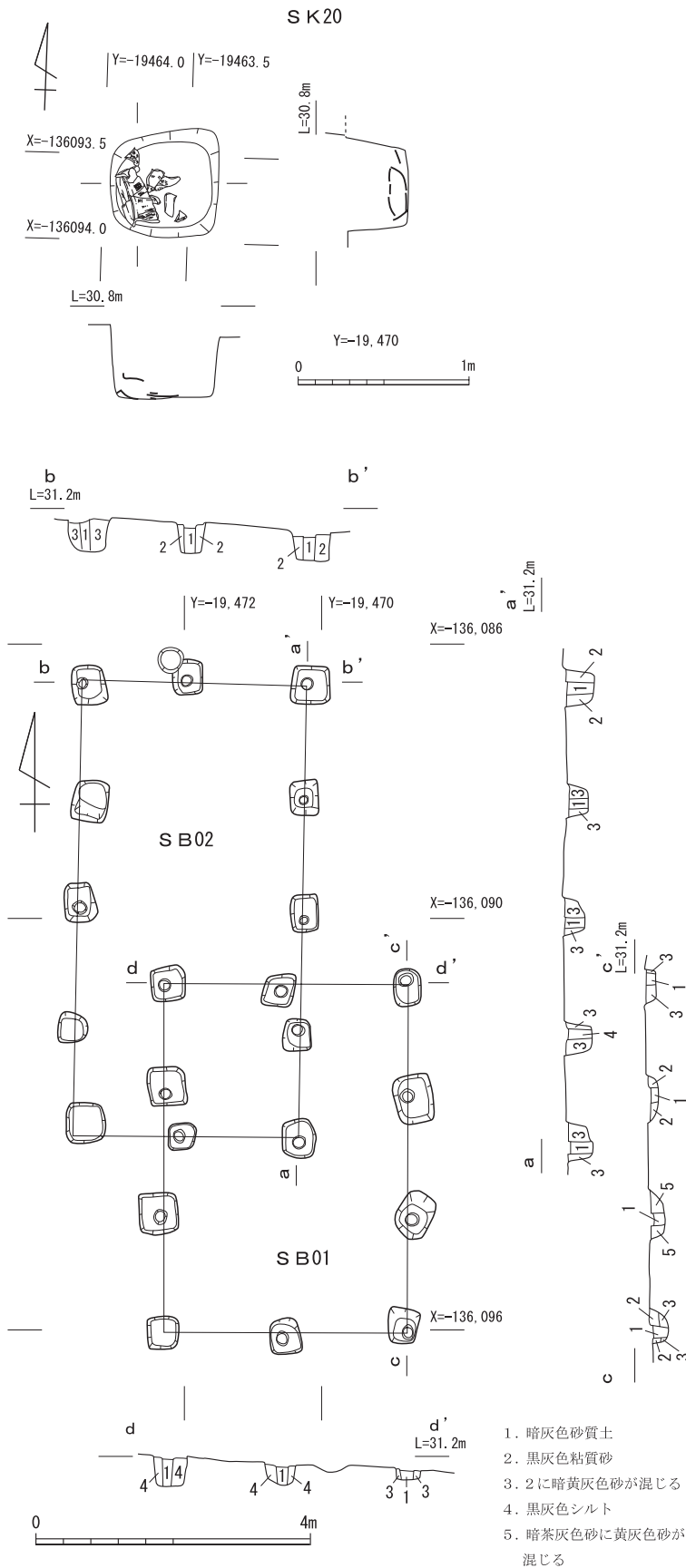


第29図 片山遺跡A1・2地区遺構平面図

ほぼ真北である。

掘立柱建物跡 S B02(第30図) S B02は南北棟の掘立柱建物跡で、建物跡の南東部が S B01と重複するが、柱穴間での切り合いはみられない。建物跡の規模は、桁行4間(6.6m)×梁間2間(3.3m)を測る。柱穴の掘形は方形で、一辺は0.4～0.6mの規模を測る。S B01と同様に、形の整わない柱穴が認められる。掘形内の柱当たりの規模は直径約0.18mである。柱穴の切り合い関係から、S B02は溝 S D63より古くなる。建物跡の方位はほぼ真北である。

掘立柱建物跡 S B03(第31図) 東西1間(約3.3m)×南北1間(約1.9m)の掘立柱建物跡である。S B01の南に位置し、その間隔は約3.3mを測る。S B03の西側柱穴列は、S B01もしくはS B02の柱穴列に対して同一軸線上に乗せる規格性は認められない。S B01とは、約1m東側にずれる状況にある。また、S B02とは東に約2mずれる。柱穴掘形は方形プランで、一辺は約0.5m前後を測る。柱穴埋土は黒灰色砂質土であり、柱痕跡は暗灰茶色粘質砂である。柱痕跡の直径は0.2mを測った。方位は北から西に約2°振るが、ほぼ真北である。北東側の柱穴は溝 S D



第30図 片山遺跡A1・2地区掘立柱建物跡S B01・02、土坑S K20実測図

64に切られている。柱穴内からの遺物の出土はみられない。

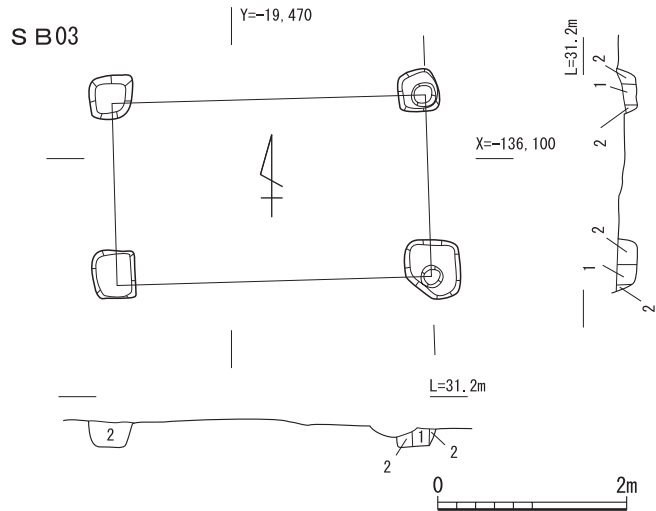
掘立柱建物跡S B04(第31図) A2地区南部で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。S B04はS B03の南西に位置し、南へ約4.0m、西に0.5m離れる。建物規模は桁行3間(5.1m)×梁間2間(3.2m)を測る。柱穴掘形プランには方形と円形が混在し、柱穴規模も1辺0.3~0.6mとばらつき、規則性はみられない。柱穴埋土は暗灰茶色粘質土である。建物方位はほぼ真北である。

土坑S K20(第30図) S B01の東、A1地区で検出した方形の土坑である。1辺約0.6m、深さ約0.4mを測る。平坦な土坑底の西側から、土師器甕の上半部と別甕の口縁破片(第33図31・32)が出土した。土器の年代観は9世紀前半頃である。

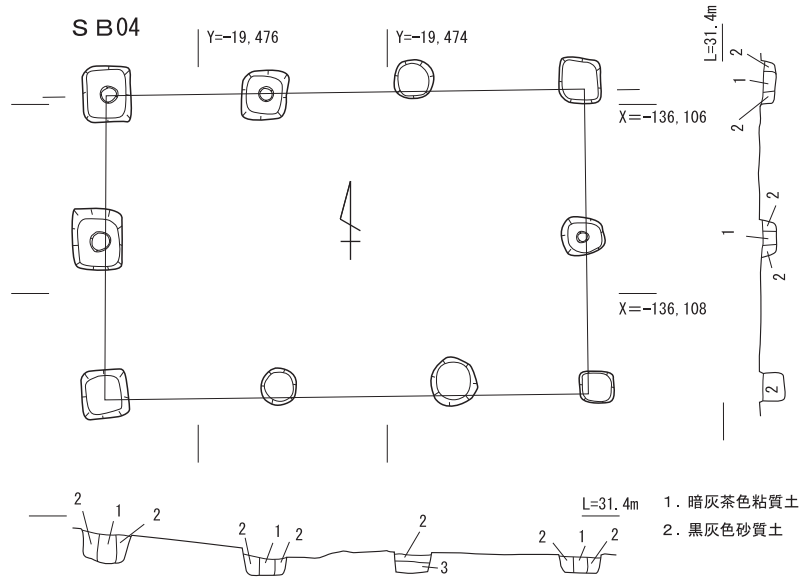
土坑S K59 A1地区南東で検出した土坑である。方形の掘形を有し、1辺は1.8~2.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗灰色粘質土であるが、土坑中央部で直径約1.2mの範囲は淡灰色粘質土が堆積していた。出土遺物がないが、中世以降の耕作関連の野井戸の可能性が高い遺構である。

土坑S X202(第32図) A2地区の北西部で検出した土坑で

ある。長楕円形の土坑は長軸を南北に向け、北端は調査地外に延びる。検出長は約8.7m、幅約5.1m、深さ約0.5mの規模を測る。底面はほぼ水平であるが、所々に微妙な凹凸が存在する。埋土の下層には砂やシルトの堆積が確認されることから、長期間土坑は埋められることなく存在したとみられる。



土坑内から多数の土器(第33図1～22・25～28)の出土をみた。特に土坑の南西部斜面付近で、およそ1mの範囲内から大小の土師器皿7点が出土した。これらの皿は完形品(接合含む)であり、上下に重なる状況も存在した。これら7点の土師器皿は、祭祀に関連した遺物と判断されるものである。そのほかの出土遺物には瓦器碗・皿、土師器皿、須恵

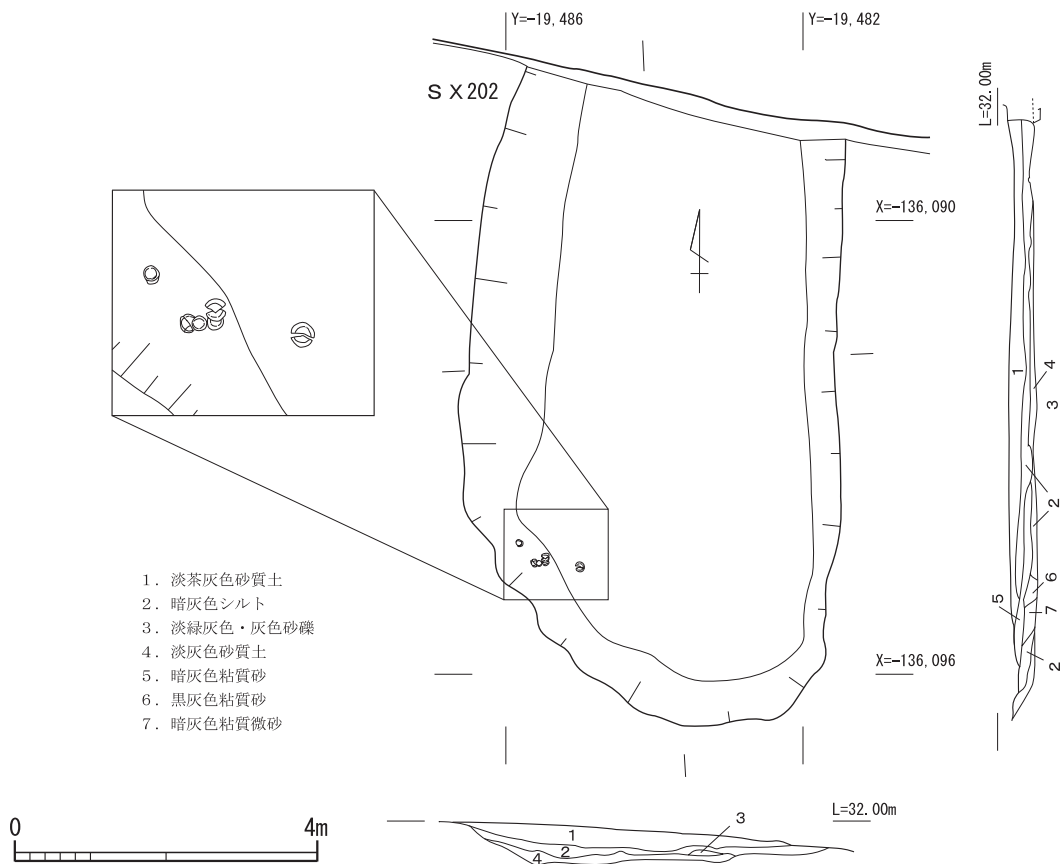


第31図 片山遺跡A1・2地区掘立柱建物跡SB03・04実測図

質鉢、土師質羽釜等がある。時期については、出土遺物の年代観から、およそ13世紀前半代と考えられる。

その他の土坑 土坑SK216は、SX202の東で検出した円形土坑である。規模は直径約1.1m、深さ約0.2mを測り、溝底はやや丸底で中央が周囲より若干下がる。遺物の出土はない。SK205はA2地区の北部で検出した円形の土坑である。規模は、直径約1.2m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰色粘質土と砂であることから、井戸の可能性もある。出土遺物は土師器の破片が少量出土している。土坑SK206は、SK205の北側で検出した。平面形は不定形で、方形ともみてとれる。長径1.8m×深さ0.1mを測り、埋土は灰色粘質砂である。また、埋土中には拳大の石が含まれていたが、遺構の性格については不明である。

溝SD64 A1地区を北西から南東に流れる素掘り溝であり、溝の南部は蛇行しながら東方向に振る状況にある。溝幅約0.5m、深さ約0.2mの規模を測る。埋土は淡灰色粗砂である。掘立



第32図 片山遺跡A 2地区土坑S X 202実測図

柱建物跡のS D01～03の柱穴をS D64が切っていた。このS D64では、時期を確定する良好な遺物は出土していない。

溝S D204 A 2地区東部を南北に貫く素掘り溝であり、東側を流れる溝S D64に並列するよう同じ動きをとる溝である。S D64とS D204の間隔は、調査区北部で約5.1m、南部では約9.2mとやや開く。溝幅は約0.4m、深さは深いところで約0.2mを測る。埋土は北部域で淡灰色粗砂、南部では灰色砂であった。調査区中央付近から南部では溝に切り合いが確認された。切り合いは同一溝とみられ、東側の溝が新しく、西側が旧溝と判断された。

溝S D203 S D204の西側で南北に延びる溝である。溝幅約0.3m、深さ約0.1mである。軸線は北から西に約4°振る。S B03・04付近の短い溝も同様な方位を採ることから、これらの溝は中世以降の耕作関連溝とみられる。

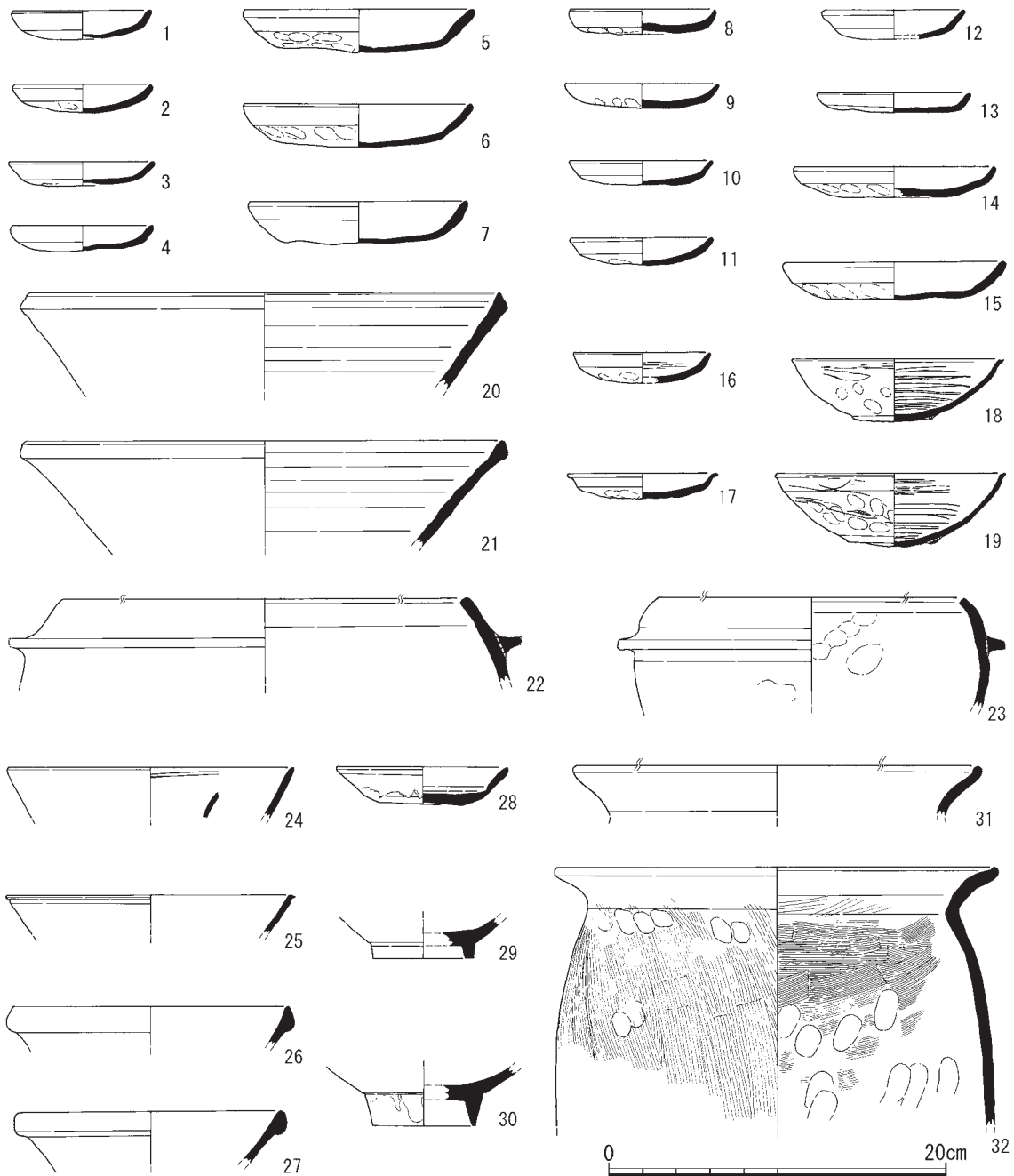
溝S D213 掘立柱建物跡S B02の中央部を東西に貫く素掘り溝である。溝幅約0.6m、深さは最深部で約0.35mを測る。溝底は一定でなく水流の影響と考えられる凹凸がみられた。埋土は灰色系の粗砂と粒の細かい砂礫である。時期の確定に至らないが、S B02の柱穴が溝の埋土を切っている。S D213の上流側の西端は土坑S X202の東約1m付近にある。遺構面もS X202付近から西側は傾斜も緩いことから、S D213の西部は平安時代中頃には削平を受けたものとみられる。

溝SD217 掘立柱建物跡SB01の南側を、南西から北東に流れる素掘り溝である。溝幅0.5～1.1m、深さは0.2～0.4mを測る。遺構面の傾斜の弱い溝東部が幅・深さとも小規模となる。溝埋土は淡灰色・白灰色砂である。溝はSB01の柱穴に切り負けている。

溝SD233 掘立柱建物跡SB04の南側で検出した東西方向の素掘り溝である。溝幅1.0～1.3m、深さは最深部で0.2mを測る。埋土は暗灰色の粘質土である。

3) 出土遺物(第33図)

1～15は土坑SX202から出土した土師器皿である。このうち1～7は祭祀関連のものと判断され、一括性の高い遺物である。小型の皿は口径が8.5～9.5cm、器高は1.5～1.7cmを測る。大



第33図 片山遺跡A1・2地区出土遺物実測図

型の皿は口径12.0～13.5cm、器高は1.8～2.5cmを測る。16・17は瓦器皿である。18・19は瓦器碗である。瓦器碗の暗文は退化が進み、口径12.1～13.5cm、器高は3.8～4.3cmと小型化傾向にある。20・21は、東播系の鉢である。今回出土した破片の中には片口は含まれていない。22・23は、土師器の羽釜である。23はA2地区北西部の精査で出土した。24～30は、輸入陶磁器である。24はA2地区南部の包含層出土の青磁碗である。25～28は土坑S X202から出土した白磁の碗(25～27)と皿(28)である。29・30の白磁碗高台は包含層から出土した。31・32は、土坑S K20から出土した土師器甕である。

4) 小結

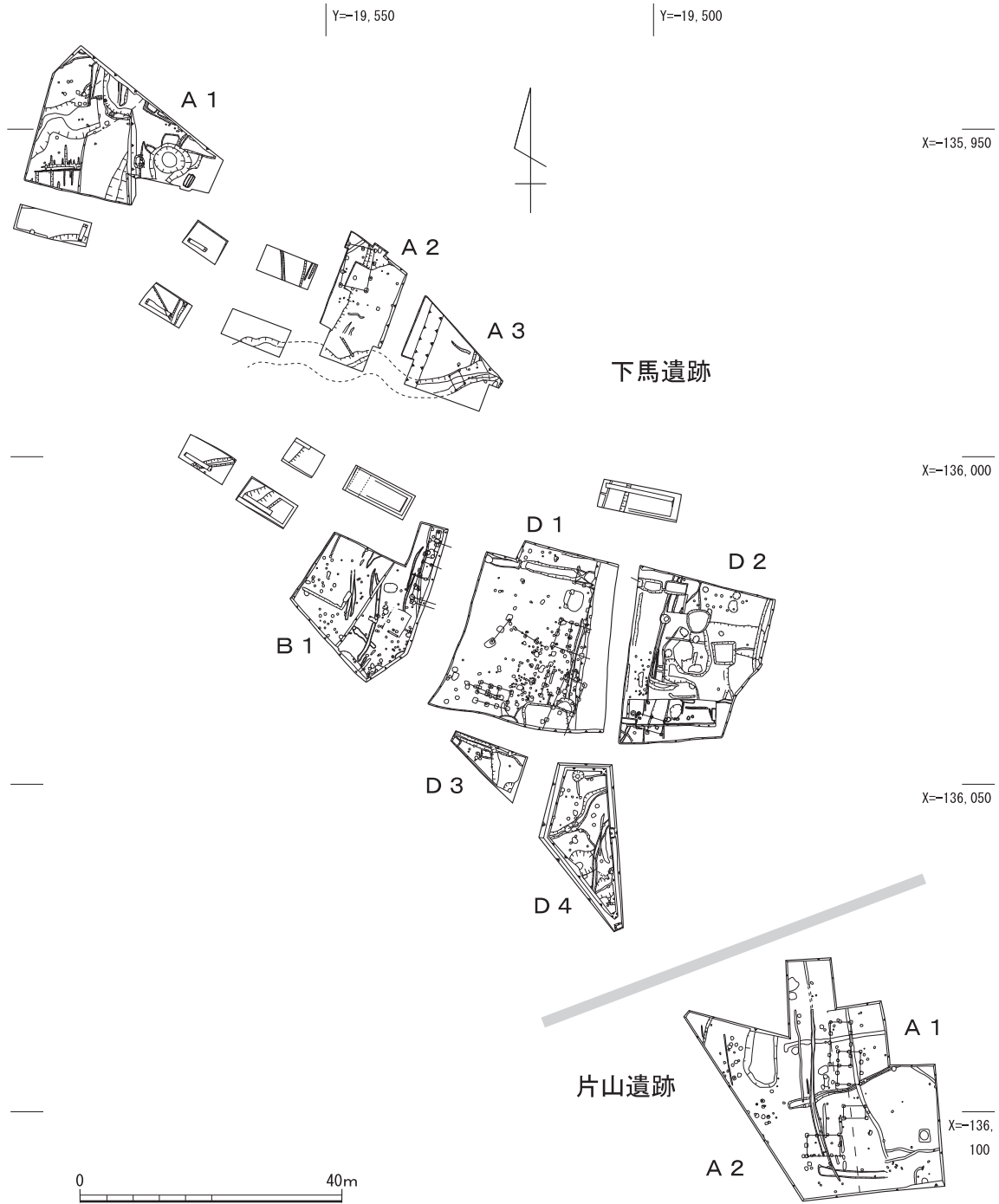
片山遺跡のA1・2地区の調査では、主要遺構として掘立柱建物跡4棟(S B01～04)、土坑、溝を検出することができた。建て替えを含む4棟の建物跡は方位が真北となる共通性はあるが、整然とした配置状況はない。柱穴内からの出土遺物が乏しく年代を確定するには至らないが、周辺出土遺物などから、平安時代中期～後期の建物跡と考えられる。大形の土坑S X202は、埋土の状況や祭祀関連遺物の出土などから、貯水関連の施設である可能性が高い。溝は、掘立柱建物以前の東西溝(S D213・217・229)と、建物廃絶後の南北溝(S D64・204等)がある。南北溝に関しては中世以降の耕作関連溝とみられ、当地に残る条里に伴う遺構と判断される。

8. まとめ

今回報告の平成21年度と22年度(前半期)調査は、下馬遺跡・片山遺跡・鞍岡山古墳群の3遺跡の調査を行った。このうち鞍岡山古墳群A地点については古墳ではないことが判明した。それに対して、下馬遺跡・片山遺跡において初めて面的な発掘調査となり、多くの遺構を検出し多量の遺物が出土したことで、遺跡の時代や性格が次第に明らかになってきた。

下馬遺跡は、今回の調査で縄文時代晩期から室町時代にかけての複合遺跡であることが明らかになった。なかでも下馬遺跡の主体となるものは、D地区の平安時代後期を中心とする遺構群と、A1地区の室町時代の寺院関連遺構である。飛鳥～奈良時代においても人々の活動が窺えるが、調査地内の遺構分布状況は旧河川跡、橋脚跡、土坑、井戸など僅かである。相楽郡には上狛・下狛の地名が示すように、古代には高句麗系の渡来人である狛氏が定住していたようである。下馬遺跡の東約250mには、狛氏の氏寺とみられる里廃寺(7世紀後半～8世紀)が存在する。下馬遺跡・片山遺跡は下狛に含まれ、これら飛鳥～奈良時代の遺構は当地に勢力を誇った狛氏一族に関連する可能性も考えられる。また、下馬遺跡・片山遺跡の東側には平城京から西国に向かう古山陽・山陰併用道が推定されている。下馬遺跡・片山遺跡はこの古街道沿いに開けた集落の一つと考えられ、調査地周辺部には、更に多くの関連遺構が存在する可能性が高い。

平安時代後期には、扇状地先端付近のB1地区からD地区にかけて遺構の分布が集中する。ほぼ平安時代後期(12世紀後半)を中心とした遺構と考えられるが、グループ化(A群～D群)によっておおよそ4期に分かれる。主要遺構間での切り合い関係が乏しく、これまでのところB群がC群に先行することが明らかである。A群とD群に関しては先後関係が不明である。平安時代後期



第34図 下馬遺跡・片山遺跡遺構分布図

から中世にかけて当地には、東大寺・興福寺・石清水八幡宮、その他多数の荘園が混在し、なかでも下粕荘は東大寺領に含まれる。今回検出した掘立柱建物跡や柵列、水場、井戸等の遺構は、庶民階級の施設とは考えにくい。遺跡の全体像が把握できない現時点では、これらの遺構は荘園管理に関連した施設の一つである可能性が高いとみられる。

室町時代では、丘陵裾に寺院関連施設が存在したようである。遺跡北側の僧坊地区には中世の下粕廃寺が存在し、今回検出の遺構と何らかの関連性が窺える。

片山遺跡では4棟の掘立柱建物跡を検出したが、北に隣接する下馬遺跡とはやや趣が異なっている。片山遺跡では平安時代中～後期の掘立柱建物跡4棟を検出したが、いずれも建物の方向性が真北となる。下馬遺跡の同時期の遺構群は、真北に対して東に傾く方向性を示している。片山遺跡の建物の柱穴掘形は小規模ながらも整った方形でもあり、建物跡の方位性からも、下馬遺跡の建物、柵列群に先行する遺構群とみられる。片山遺跡A地区と下馬遺跡D地区はほぼ遺跡範囲が接触状況にある。地形的には現存する耕作地の形状から、西側の丘陵から流れ出た小河川が下馬遺跡D3・4地区付近を流れていたようである。調査地区や遺跡毎で異なる遺構群の状況は、それぞれ時期毎の土地利用に際し、河川による制限(区域割など)を受けていたとみられる。

今後、下馬遺跡D4地区の東側と片山遺跡A2地区北側間での調査計画もあることから、遺跡の性格・内容等を考える上で、今後の調査成果に期待が寄せられるところである。

圖 版

八幡木津線関連遺跡 図版第 1

下馬遺跡第 2 次



(1)下馬遺跡調査地遠景(南から)



(2)下馬遺跡調査地遠景(東から)



(1)下馬遺跡調査地遠景(西から)



(2)下馬遺跡調査地全景(上が北)



(1) 下馬遺跡・片山遺跡遠景
(南東から)



(2) A1地区全景(西から)



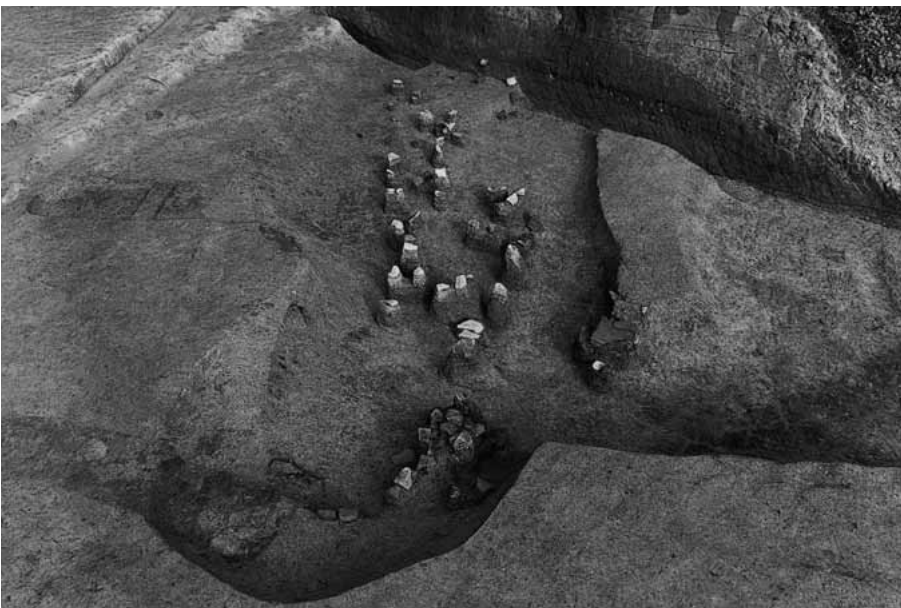
(3) A1地区西部全景(南から)



(1) A 1 地区河川跡 S R 125
縄文土器出土状況(東から)



(2) A 1 地区東部全景(西から)



(3) A 1 地区瓦溜り S X 120 全景
(南から)



(1) A 1 地区炉跡 S X121 炭層
検出状況(東から)



(2) A 1 地区炉跡 S X121 全景
(東から)



(3) A 1 地区井戸 S E129 全景
(南から)



(1) A 1 地区全景(右が北)



(2) A 2・3 地区全景(上が北)



(1) A 2 地区全景(南西から)



(2) A 2 地区掘立柱建物跡 S B58
全景(西から)



(3) A 3 地区全景(北東から)



(1) A 3 地区河川跡 S R 16 全景
(西から)



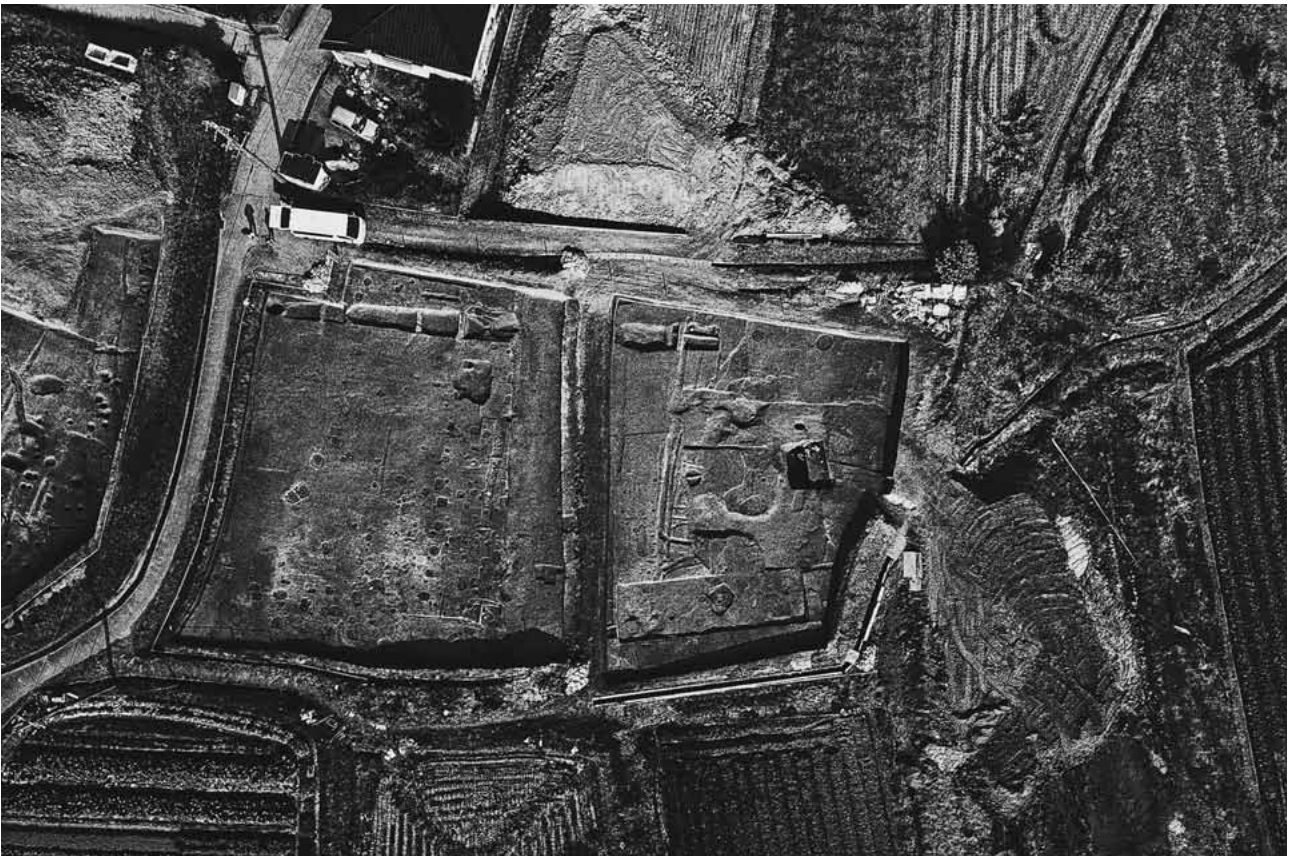
(2) A 3 地区北壁内河川跡 S R 16
堆積土層(南西から)



(3) A 3 地区河川跡 S R 16 底面
平瓶出土状況(南から)



(1) B 1 地区全景(右が北)



(2) D 1・2 地区全景(上が北)



(1) D 1 ・ 2 地区全景(南から)



(2) D 1 ・ 2 地区全景(北から)

下馬遺跡第 2 次



(1) B 1 地区全景(北西から)



(2) B 1 地区掘立柱建物跡
S B 132・133全景(北から)



(3) D 1 地区遺構検出状況(東から)



(1) D 1 地区掘立柱建物跡 S B134、
柵列 S A03・57、土坑 S K23
全景(東から)



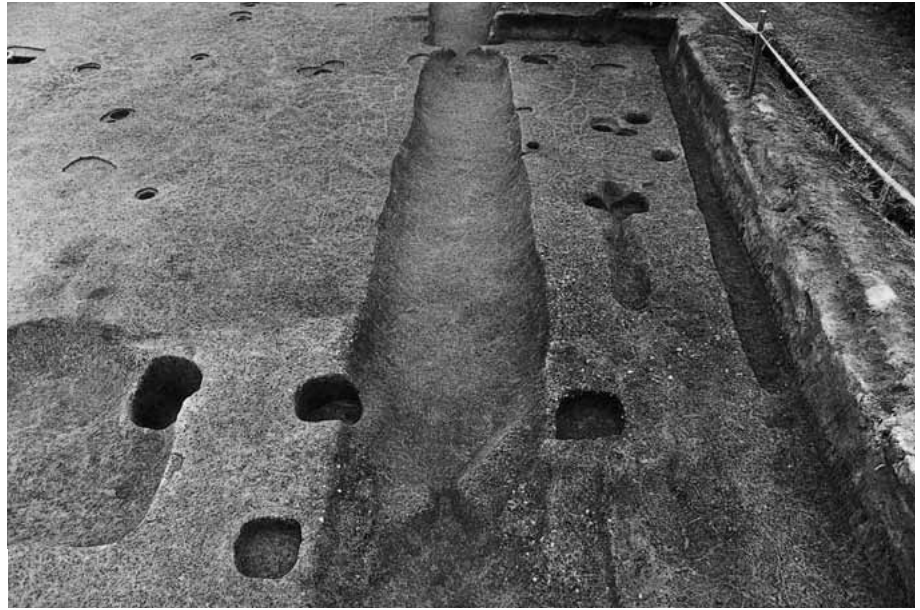
(2) D 1 地区掘立柱建物跡 S B135、
柵列 S A30、土坑 S K36全景
(東から)



(3) D 1 地区溝状遺構 S X02全景
(東から)

下馬遺跡第 2 次

(1) D 1 地区溝状遺構 S X02
(東から)



(2) D 1 地区溝状遺構 S X02 第 1 区
と第 2 区間の水口(東から)



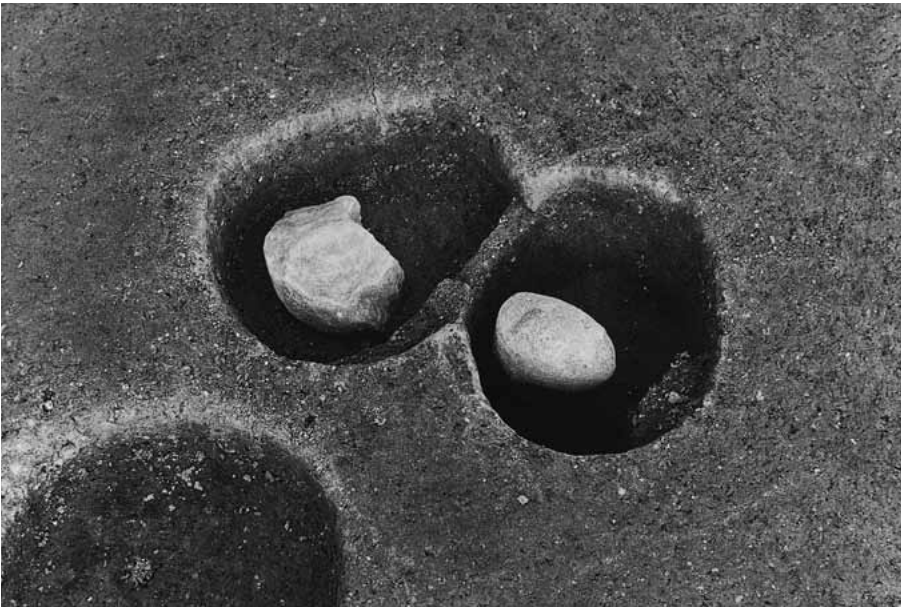
(3) D 1 地区溝状遺構 S X02
第 2 区中央畔土層断面(東から)



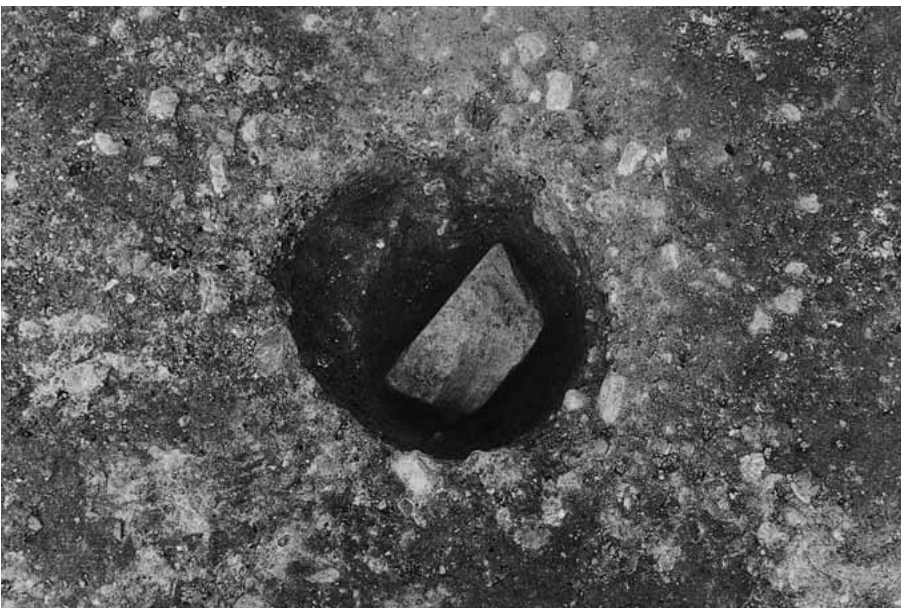
下馬遺跡第 2 次



(1) D 1 地区土坑 S K23 全景
(南から)



(2) D 1 地区柱穴 P 44・97 根石
検出状況 (南西から)



(3) D 1 地区柱穴 P 107 根石
検出状況 (南東から)



(1) D 2 地区全景(西から)



(2) D 2 地区溝状遺構 S X02
第 4・5 区全景(北から)



(3) D 2 地区掘立柱建物跡 S B55
全景(南から)

下馬遺跡第 2 次



(1) D 2 地区井戸 S E 54 井戸枿材
検出状況(西から)



(2) D 2 地区井戸 S E 54 井戸枿
(北西から)



(3) D 2 地区井戸 S E 32 全景
(南東から)

片山遺跡第 2 次



(1) 第 3 トレンチ全景(西から)



(2) 第 4 トレンチ全景(東から)



(3) 第 5 トレンチ全景(東から)



(1) 第 6 トレンチ全景(南から)



(2) 第 22 トレンチ全景(南から)



(3) 第 23 トレンチ全景(東から)



(1) 第24トレンチ全景(東から)



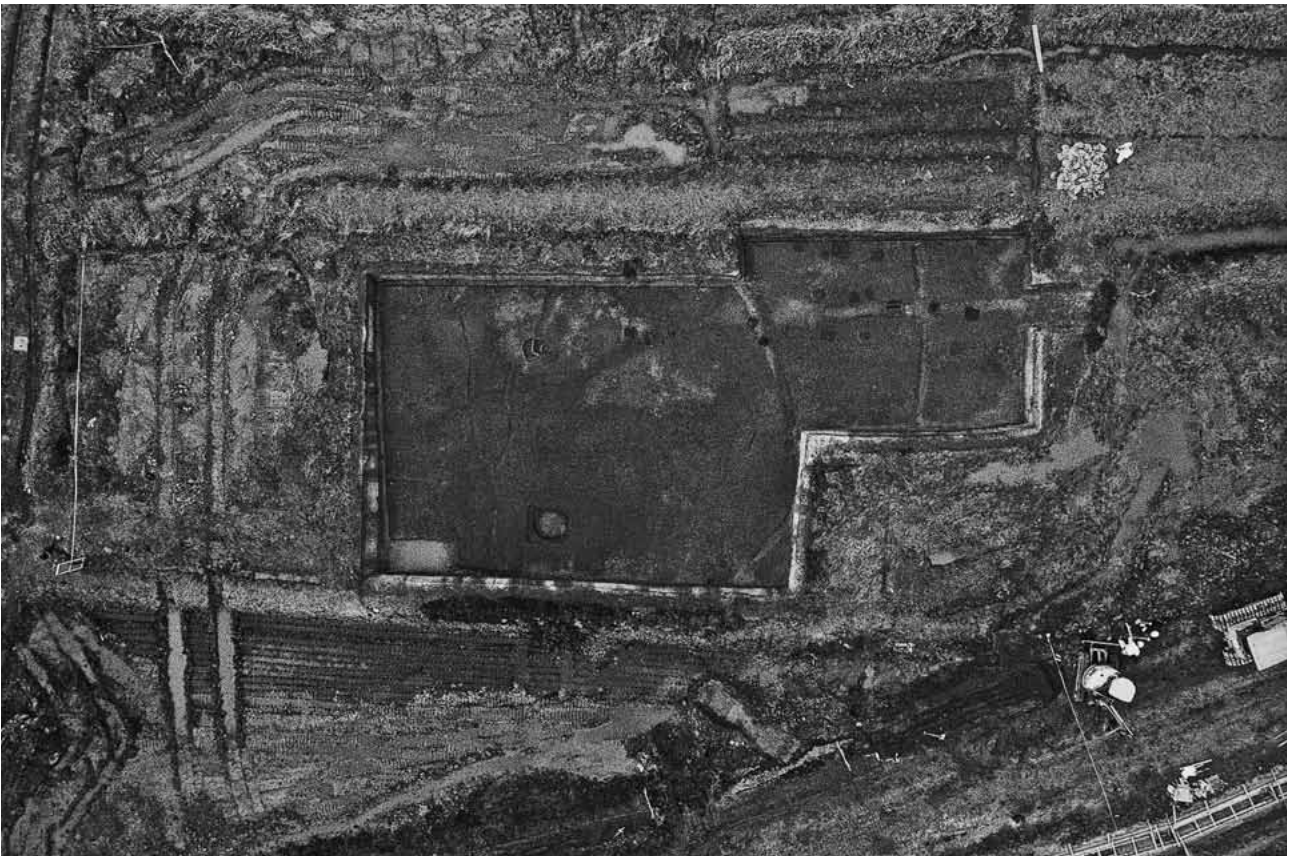
(2) 第25トレンチ全景(東から)



(3) 第26トレンチ全景(東から)



(1) 片山遺跡 A 1 地区全景(東から)



(2) A 1 地区全景(右が北)



(1) A 1 地区全景(北から)



(2) A 1 地区掘立柱建物跡 S B01・02 検出状況(東から)

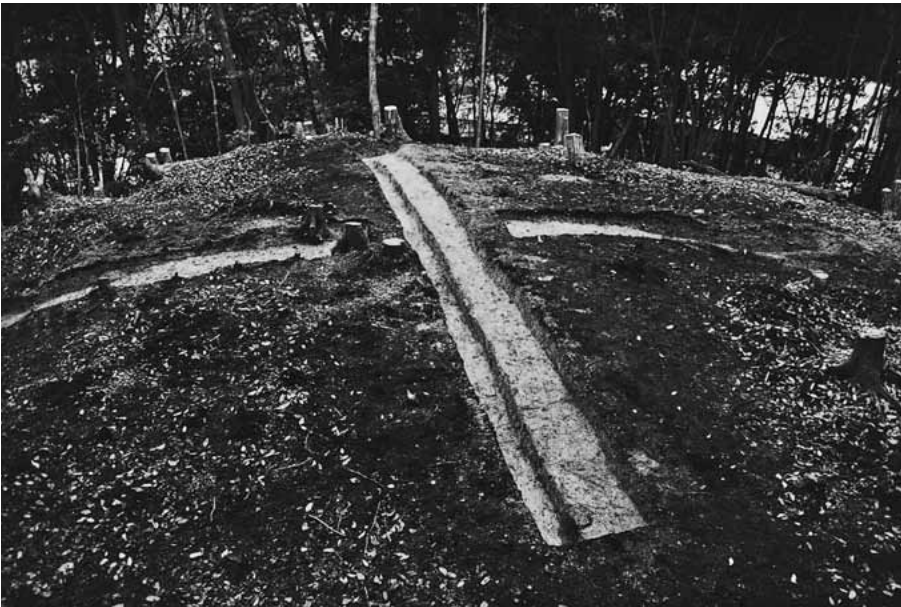


(3) A 1 地区土坑 S K20 全景(南から)

鞍岡山古墳群



(1) A 地点調査前(南から)



(2) A 地点トレンチ調査状況
(南西から)



(3) A 地点最高所トレンチ地山
検出状況(南東から)

下馬遺跡第 3 次



(1) D 3 地区全景(南東から)



(2) D 3 地区井戸 S E 312 検出状況
(北から)



(3) D 4 地区上層遺構面全景
(北から)



(1) D 4 地区柵列 S A340 全景
(南から)



(2) D 4 地区柵列 S A340 全景
(西から)



(3) D 4 地区下層遺構面全景
(北から)

下馬遺跡第 3 次



(1) D 4 地区下層遺構面全景
(西から)



(2) D 4 地区井戸 S E 328 全景
(南西から)



(3) D 4 地区溝 S D 339 全景
(北東から)



(1) A 2 地区全景(南から)



(2) A 2 地区全景(北から)



(3) A 2 地区掘立柱建物跡群
検出状況(北から)



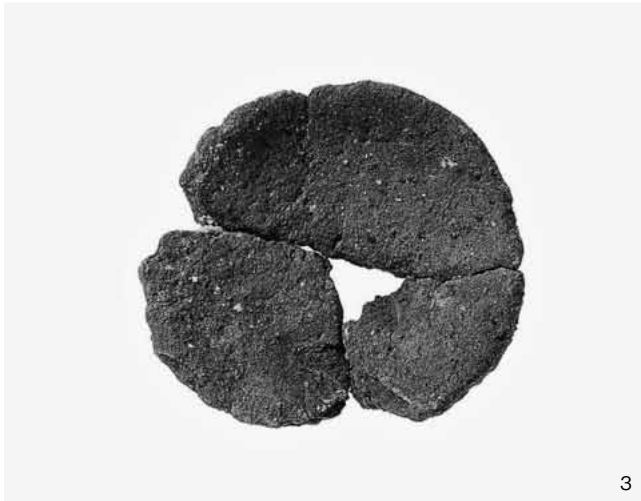
(1) A 2 地区掘立柱建物跡 S B04
全景(南から)



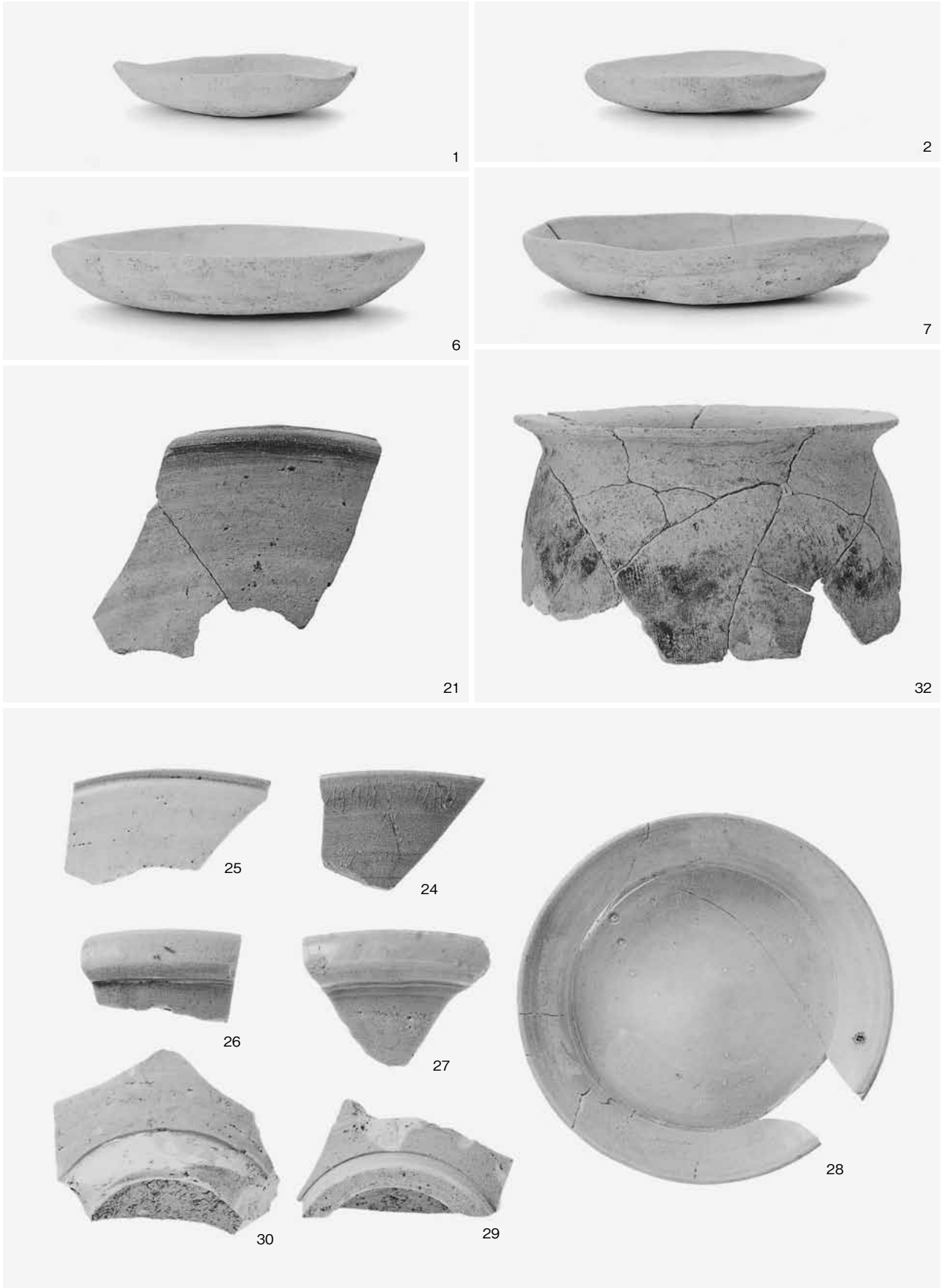
(2) A 2 地区土坑 S X202 全景
(南から)



(3) A 2 地区土坑 S X202
土師器皿群出土状況(東から)







出土遺物 3